
COBALT-SERIES
聖石の使徒
前田珠子
其は天秤をかざす者Ⅱ
集英社

COBALT-SERIES

聖石の使徒

其(そ)は天秤(てんびん)をかざす者Ⅱ

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

聖石の使徒

其(そ)は天秤(てんびん)をかざす者Ⅱ

前田珠子

集英社

目　次

聖石の使徒
其は天秤をかざす者II

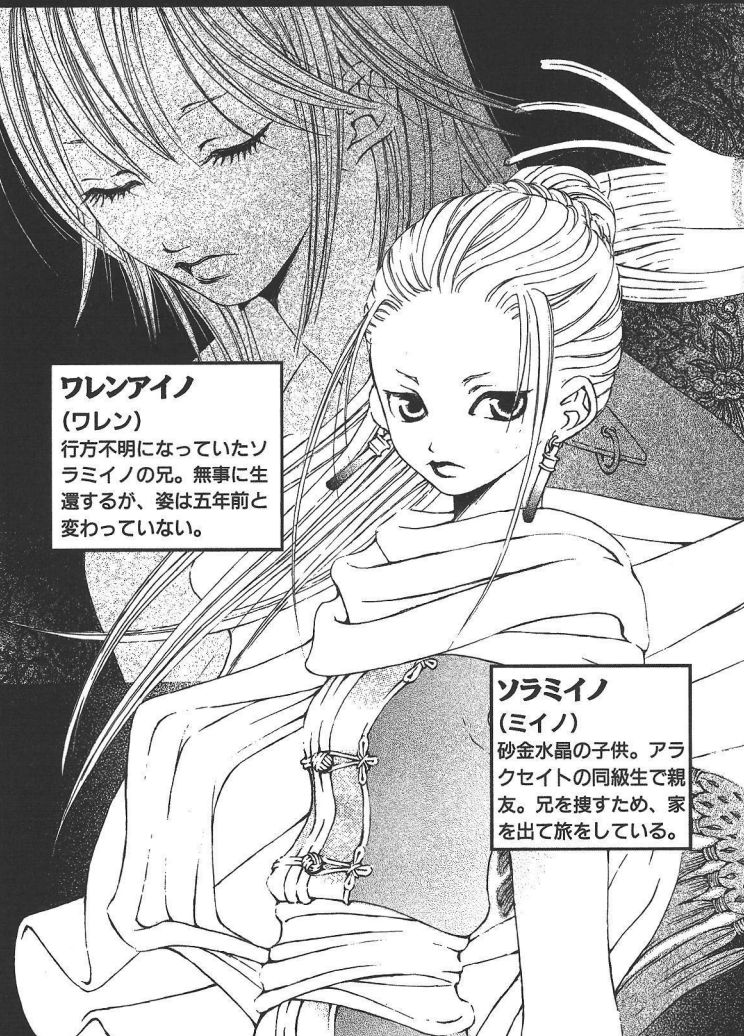
バルヴァローズ創世神話……7

其は天秤をかざす者II……17

あとがき……210


ガネルオージェ
（ガネル）
稀有な存在である金剛石の子供。師匠である青玉の使徒に絶対的な信頼を寄せていたのだが、ある事件をきっかけに破門を言い渡されている。
アラクセイト
（アーク）
石墨の子供で、火神の加護を受けたイイタールの娘。自分の能力を完全に制御するため、日々努力しているが…。

聖石の使徒■登場人物紹介

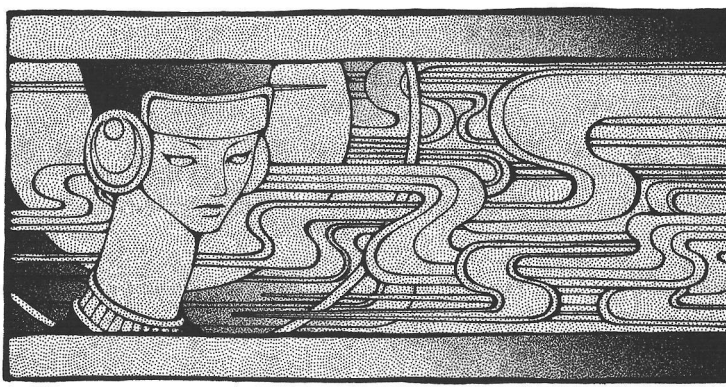


ワレンアイノ
(ワレン)
行方不明になっていたソラミイノの兄。無事に生還するが、姿は五年前と変わっていない。

ソラミイノ
(ミイノ)
砂金水晶の子供。アラクセイトの同級生で親友。兄を捜すため、家を出て旅をしている。

イラスト／山本鳥尾

バルヴァローズ創世神話



麗しき、万能の至高神セイトーリ――。

恵み豊かにして美しいこの世界――バルヴァローズはかの女神の手により生まれた。

女神はまた、この世界のために、多くの神々を産み落とした。

最初に生まれたのは太陽女神ライアトーリ。

セイトーリの両手の間に太陽が生じた瞬間、彼女は生まれた。

次いで生まれたのは三つの月を司る、三つ子の月神――シイムタール、サイサロール、サラムトーリたちだった。

女神の左の瞳から、不意に三粒の涙がこぼれ、月となると同時に三人は誕生したのだ。シイムタールとサイサロールは、バルヴァローズに生まれた、初めての男神だった。

女神の右の瞳からこぼれた涙は海となり、その吐息は風となり、ひと雫の血は大地となった。

それと同時に海神アイルトーリと空神パルムローリ、地神アスカニーリが生まれいでた。

セイトーリは、バルヴァローズに生きるであろう者たちのために、やさしい静寂と暗闇を与

えたいと願い、歌を歌った――その歌声は女神の願いそのものの姿となり、世界に夜が生まれた。夜神タイナトーリの誕生である。

女神はバルヴァローズをかけがえなく思っており、だからこそ考えられ得るすべての豊かさと美しさと愛情をこの世界に贈りたいと思っていた。また同時に子供たちにもこの世界を愛してもらいたいと願っていた。

それゆえに、この世界を作る手伝いをしてくれぬかと問い、祝福を与えてほしいと子供たちに頼んだのである。

女神の子供たちである神々は、母神に言われるまでもなく、バルヴァローズを愛していたため、喜んで応じた。

海神アイルトーリは真水の神カンラタールを生み、カンラタールもまた多くの子供たちを誕生させた。かくして水は、海以外にも居場所を得たのである。

空神パルムローリは空を吹き渡る風の神イーオダールを生み、イーオダールも多くの子供たちを作った。

彼らの誕生により、空間はさまざまな表情を持つこととなり、気象や天候が生じた。

太陽神ライアトーリは、自らの光と温もりを伝える者として、火神イイタールを生みだし、イイタールもまた多くの子供を持ったが、彼らはしばしば大きすぎる傷をバルヴァローズにも

たらしたため、しばらくの間ライアトーリの監視下に置かれた。

さて、月神のひとりであるサイサロールは、天空の神ながら、大地に対して非常な愛着を抱いていた。

彼は興味の赴くままに地上に降り立ち、妹神であるアスカニーリが眉宇を顰めるほどに大地の気配を満喫した。

天空に属する存在でありながら、彼は『空』を隔てたバルヴァローズの地に大きな好意を寄せていたのだ。

『許しておくれ』

と、彼は妹神に謝った。

『けれど、天空ではない、大地という場所が、これほどに心地よいとは思いもしなかったのだよ。理を乱すほど、頻繁に訪れるつもりはない……ただ、それに触れない程度に訪れることをどうか許してはくれないかい？』

サイサロールの真摯な懇願に、アスカニーリも心動かされた。

しかし、大地の方々に、月神の気配を残されるのは困ると、彼女は兄神に訴えた。

バルヴァローズはまだまだ不安定な世界だったのだ。

そのため、彼女はひとつの条件を提示した。

自らが支配する大地の中で、最も安定し、他神の影響を受けにくい場所――バルヴァローズ中に九つある場所に関してのみ、兄である月神の訪いを認めると……仕方なくとはいえ約束したのである。

さてそのアスカニーリだが、彼女は子供を産まなかった。

甥である水神カンラタールと共鳴することで、やがて生まれてくるであろうバルヴァローズの住人たちをやさしく包みこむ環境を作ろうとしたのだ。

セイトーリの産み落とした子供神は、ほかに四神……三つ子の月神と夜神との間で、小さな諍いが起こったのはこのころのことだった。

三つ子の月神たちはみな、自分と夜神と組むことで、星神を生み出したいと思ったのだ。三人の神から同時に同じことを申しこまれ、夜神は深く悩むこととなった。

結局、夜神が申し出を受けたのは、三つ子の末妹であるサラムトーリに対してだった。ほかのふたり――シイムタールとサイサロール――が、我こそがと強く主張したのに対して、サラムトーリだけが夜の空を飾る星々の数や光量、闇との均衡に心砕く気遣いをみせたからだった。

こうして雲のない夜空には、小さな星のきらめきが生まれることとなった。

だが、一層美しくなったバルヴァローズに、穏やかならざるものが生じはじめたのもこのこ

ろのことだった。

タイナトーリに選ばれなかったふたりの月神の不満や憤りが、澱のごとく世界に溜まり始めたのだ。

ふたりの月神たちは、自分たちが選ばれなかったことにのみ心捕らわれ、前を見ることをやめてしまったのだ。

ほかに自らにできることはないかと考えるより先に、選ばれた者たちのことを妬み、嫉み——。

なぜ他者が選ばれたのかと内省することなく、自分たちを拒んだ——と、彼らは感じていた——者たちに対する怒りと憎しみを育んでいったのだ。

いつしかふたりの月神は、バルヴァローズを蝕む毒気——瘴気と後に呼ばれることとなるもの——のみを発するようになってしまった。

瘴気はこのふたりによって初めて、この世界に生じたのだ。

セイトーリや姉妹神たちの再三の説得にも拘わらず、月神ふたりはバルヴァローズに瘴気を溜めこんでいく一方だった。

いや、そればかりではなかった。

疎外感を覚えたふたりの月神たちは、ついにはその原因ともなったバルヴァローズ自体へ、

憎悪の念を向けるに至ったのである。

セイトーリはその事態を嘆き、何度もふたりの息子神へと語りかけ、説得しようとした。

それこそ、何度も。

だが、ふたりは行為を改めようとはしなかった。バルヴァローズに集う瘴気は増大する一方だった——ついには世界そのものの存亡すら危うくなるほどに。

このままではバルヴァローズ諸共、自らを除くすべての子供神、孫神のことごとくが滅んでしまう……ふたりの月神が生み出した瘴気によって！

そう悟ったとき、至高神セイトーリはひとつの決断を下した。

「なんと悲しくも情けないこと……」

うめきながら、至高の女神は自らの左の瞳から零れた二粒の涙を……その姿を変えた者を消滅させ、嘆きの涙を流した。

セイトーリの流す涙には万能の力が宿る。

だが、それですら浄化できぬほどの瘴気が、すでにバルヴァローズにははびこっていたのである。

残る手段はただひとつ——至高の女神は、ふたりの子供神の生み出した瘴気を抱いて眠りにつくことを決意した。

眠りのなかで、女神は子供神ふたりから放たれた瘴気のすべてを浄化する。
浄化しきるその時まで、かの女神は眠りつづける――。
それは、絶対の約束。
セイトーリが瘴気を胸に、大地の奥底に我が身を沈めたそのときに刻まれた……。
女神が眠りにつく寸前に生み出された誕生の女神と死滅の男神の存在そのものに刻印された……絶対の、約束。
だから、至高の女神であるセイトーリの最後の娘である誕生神カリカトーリと最後の息子である死神ナラムタールは、バルヴァローズに生まれ、いずれは死にゆくすべての存在にこう語りかけたのだ。
「瘴の女神の眠りを妨げてはならぬ――」
と――。
瘴の女神とは、瘴気を封印して眠りつづける至高の女神――。
妨げたとき、訪れるものはひとつきりだと。
つまりは破滅あるのみだと、はっきりと、神代の約束には記されている……。

瘴の女神の眠りを妨げてはならない。
瘴の女神を目覚めさせてはならない。
その眠りを守るため……聖石の使徒は生まれたのだ……。

アスカニーリは、今でも考える。
あのとき、本当にほかに道はなかったのかと。
いまさら考えても仕方のないことだとはわかっている。時は戻らない。ふたりの兄は喪われてしまった。
それでも……思わずにはいられない。
もしも、兄たちが母神に背こうとしていたあのとき、もっと早くに気づいていれば……そしてもし、兄たちを説得することができたなら――。
誰ひとり欠けることなく、この世界は満たされていただろうに、と。

それは夢だ――決して叶わぬ、夢。
だが、叶わなかったからこそ、地神は思いを馳せずにいられないのだ。
そんな彼女の抱えた後ろめたさゆえか、世界には九つの空洞が、ある。
喪月神との縁の残る場所が、バルヴァローズには九つ、存在するのだ……。

其(そ)は天秤(てんびん)をかざす者Ⅱ



12

カチカチ、カチカチ――薪の束を前にして、紫紺の髪の少女が真剣な顔で座りこんでいる。
その手には二つの石が握られている。
少女はその石をぶつけあわせているのだ。
カチッ、カチッと音がすると同時に、小さな火花が生じるが、それはなかなか彼女の狙い通りにはなってくれない。薪に着火しないのだ。
そんな少女の背後から、呆れたような声がかけられる。
「なにをやってるんだ？」
低い、青年の声だった。
それが誰の声かわかっているからだろう、少女は振り返ろうとはしなかった。
「見てわかりませんか？」
答える声は微かながら苛立たしげに震えていた。

「……火を起こしているように見えるが……」

見えるもなにも、それ以外のなにものでもないはずだが、青年の声から訝りの響きは消えない。

「なんでわざわざ火打ち石なんか使ってるんだ？」

火を起こすのに火打ち石を使う――普通なら当たり前のことなのだが、青年がそんな風に尋ねたのには理由があった。

しかし、少女は答えない。

いや、答える余裕がないのだ。

もし青年が彼女の正面にいれば、その黄橙色の双眸に「話しかけないで」とでも言いたげな光が浮かんでいることに気づいたかもしれないが……残念ながら彼は少女の背後にいた。

「さっさと火を点ければいいじゃないか」

こともなげに言われた瞬間、少女の肩がぴくりと震えた。

「……って……せんか……」

くぐもった声に、青年が首をかしげた。

「ああ？」

少女が真っ赤な顔で振り返ったのはそのときだった。

「気が散るからっ、ちょっと黙っててくれませんかって言ったんですっ！」

大変な剣幕だった。

それもそのはず、少女――アラクセイトにとって「なんで火打ち石なんか……」のくだりは、到底聞き逃しにはできない、致命的な急所だったのだから。

しかし、そのことを青年は知らない。

ますます怪訝そうな顔になった。

「なに怒ってるんだ？　その手つきや段取りを見りゃ、普段はやってないのがばればれじゃないか。おれのことを警戒してるにしても、おれはもう、おまえがイイタールの娘だって知ってるんだから、意味がないだろう？」

灰銀色の双眸に不思議そうな光をたたえ、問い返してきた青年――ガネルオージェの顔を見て、アラクセイトは大きく息をついた。

苛立ちのあまり、相手に八つ当たりしてしまったことに気づいたのだ。

「……ごめんなさい。そういうわけじゃないんです。ただ……いまは時が時だし、カーラさまたちがそばにいらっしゃるわけでもないし、そうである以上やっぱり騒ぎになりそうなことは慎むべきだと思うわけで……」

次第に声が小さくなっていくのは、自己嫌悪のせいである。

そう、アラクセイトは非常に困った事情の持ち主なのだ。

まず第一に、ガネルオージェの言う通り、彼女がイイタールの娘と呼ばれる存在であることだ。

火神イイタールから特別な加護を与えられた子供はイイタールの娘、あるいは息子と呼ばれる。火神自らが名付け、またその真名を与えた存在に対する総称なのだ。

アラクセイトの場合、その恩寵は『喪月神の生み出した瘴気すらも焼き尽くす炎』を生み出すというものだった。聖石の子供として生まれ、いずれは使徒として瘴気を浄化する任務につくかもしれない立場の子供にとって、これほどありがたいことはない――はずだった。

しかしながら、彼女の場合、恩寵と呼ぶにはいささか問題があった。

事情その二――彼女は以前、喪月神の残留思念とでも呼ばれるモノに拐かされたことがあり、その際受けた大きすぎる恐怖ゆえか、自らの能力を制御する方法を記憶とともに封じてしまったのだ。

今では記憶も知識も取り戻したわけだが、その誘拐騒ぎ以前と同じように能力を制御できるかと問われれば、答えは否、だった。

そこで出てくるのが、事情その三、及び四である。

彼女は聖石の子供として生まれてきた。

生まれ落ちたとき、石を抱いて——実際は体の一部に半融合した状態で石が埋まっているのだという話だが——いる赤子全般を指す。

彼女が抱いて生まれてきた石は石墨——筆記用具の材料として知られているものだった。

本来なら、半貴石にも数えられない石なのだが、この場合問題はそのことではない。

石墨を構成するのは炭素——つまるところ、『燃える』ということだ。

さらに面倒なことに、アラクセイトは特殊な能力の持ち主で、非常な緊張状態に置かれた場合などに、自らの子供石である石墨を、別の種類の石に変化させることができるのだ。

……よりにもよって、金剛石に！

この世界にあって最も硬く、そして最も炎の媒介に適している……それも『聖石の子供石』としての金剛石を、彼女は生み出すことができるのだ！

火神の厚い加護を受けた……だが十全に力を制御できずにいる娘に、恐らくは何物をも焼き尽くせるほどの炎火力——それだけでも不安を覚える者はいるに違いない。

しかも彼女にはその炎をどこまでも強く大きく育てることはできるのに、鎮めることはできないのだ！

こんな物騒な存在はない。

幸い、いまのところ、この事実を知る者は本人を除けば片手の指で数えられる程度の人間し

かいないわけだが、やはり本人を除く関係者一同は、一日も早い彼女の完全な能力制御を祈るように待っていたりするわけだ。

さて、この場合のガネルオージェの立場だが……彼はある意味事情に通じておりながら、完全には理解していないというものだった。

つまり、アラクセイトがイイタールの娘であること、さらには臨機応変に——関係者に言わせれば『火事場の馬鹿力の暴走未遂——ですんでよかった——例』としか呼びようのないものだったわけだが——属性の違う色彩の金剛石を生み出せること……この二事を知ったことによって、彼は彼女が自在に力を操れる相手なのだと、どうやら誤解しているらしいのだ。

だから……先ほどの発言につながる。

火打ち石など使わずに、さっさと火を点けてしまえばいい——とは、皮肉でもなんでもない、彼の本心だったのだ。

第一印象はともかく——第二、第三、第四印象ぐらいまでは最悪になるような体験を味わわされたアラクセイトだったが、何となくだがそのことは感じ取れたものだから、少し悩んでしまった。

自分が、役立たずの落ちこぼれであることを、喜んで他人に打ち明けたい人間はいない。

進んで馬鹿にされたい人間など、いるはずがないのだ。

けれど……とアラクセイトは思った。

（でも、この人には、ちゃんと言っておかなきゃ……だって、ナウルニールさまの子供石がほしいからって理由でなんだか一緒に来てくれそうな感じになってるけど、騒ぎの最中になってから、こんなはずじゃなかったっ！　とか言われても困るし。第一、この人の聖石のこと考えると、やっぱり注意は必要だろうし……）

ただでさえ騒ぎは厳禁の状況なのだ。

自分と親友のソラミイノは現在、家出中なのだ。正確に言えば、本当の意味で家出したのはソラミイノひとりで、アラクセイトは無理矢理くっついてきたおまけにすぎないのだが……まあ、そのことはいまは横に置いておくことにして、だ。

問題は、ソラミイノが大変な『良い家』の出身であるということなのだ。

しかも、彼女たちが属する地神神殿に相当な影響力を持つ良家の――言うなれば『ご令嬢』なわけである。

権力と人脈の限りを尽くして彼女の実家――ストリーヴ家が探索の手をのばしていてもおかしくはない。目立つこと――つまるところ、騒ぎは禁物というわけである。

なまじ神殿内部に力を持つ一族だからこそ、気が抜けない。

どんな些細な異変から、こちらの居場所が知れるともしれないのだから。

そんな状況で、だ。
アラクセイトの能力が暴走してしまったとしたら……!?
あっさりと居場所を突き止められた挙句に、付近の神殿から派遣された聖石の使徒たちによって強制送還されるのは目に見えているではないか。
足手まといにはならない。
力を決して暴走させたりはしない。
このふたつは、アラクセイトが家出決行中のソラミイノに約束し、それでようやく同行を許してもらった条件でもあった。
だから……これだけは、なにがなんでも守らなければならないのだ！
ただ、その場合、付随してくる問題があるわけだが――。
「ミイノには黙っててくれるって約束してくれますか？」
声をひそめ、こっそりとささやきかけたアラクセイトだが、ガネルオージェはきょとんとした顔のままだった。
「……はあ……？」
どうやら状況を把握できずにいるらしい様子の相手に、（なんだか……ちょっと不安っていうか――頼りない気がするっていうか……）などということを思いながら、アラクセイトは思

いきって打ち明けた。

「わたし、絶対、絶対、力を暴走させるわけにはいかないんです。カーラさまは大丈夫だって言ってくださったけど、本当に、完全に制御できるかどうかはわからないし……騒ぎなんて起こしたら、ミイノ、お家に連れ戻されちゃうかもしれないし、第一、制御できなかったら放り出すっていわれてるし……」

だから、慣れてなくてもなんでも、火打ち石を使って火を起こそうとしていたのだ——と、訴えたかったアラクセイトなのだが、ガネルオージェは全然別のことに納得したようにうなずいてくれた。

「なるほどな。確かにお前みたいなぽよよんじゃ、ひとりになったとたん、悪党どもの餌食になるのが目に見えてるもんな」

その程度のことはさすがに気づいていたか——と、感心したように青年はつぶやいたものだが、当然のことながら、アラクセイトは素直に喜べなかった。

「そういうことじゃありませんっ！　あな……あなたはミイノのことよく知らないからわからないんでしょうけどっ！　ミイノはいま、ちょっと普通と違うんです」

そう口にした瞬間、アラクセイトは自らの言葉に押しつぶされそうになっている自分に気づかされた。

事情を知らないガネルオージェに八つ当たるのは、筋違いもいいところだ。
確かに彼には、あわや死にかけるほどの迷惑な騒ぎに巻き込まれたという私怨はある。
だが、彼は先日、自分とミイノを、悪党たちから守ってもくれたのだ。命の借りは命でしか返せないとしても、彼は充分な働きを見せてくれた。たとえその目的が、アラクセイトが貰い、ソラミイノが管理している、彼の師匠たち――青玉と紅玉の使徒という、大変に豪華なコンビなわけだが――の生み出した『聖石の子供石』にあるとはいえ、事実は事実だ。
彼に八つ当たりしていい理由などない。
自らの非を即座に認める潔さは、アラクセイトの持つ美点のひとつだった。
だから、彼女は、すぐに謝った。
「ごめんなさい」
悄然とする彼女に、ガネルオージェは悪戯っぽく「ああ？」ととぼけるように応じた。
「あ、あの、その……ガネルさんはなにも悪くないのに……」
なのに当たるようなことを言っちゃって……。
もごもごと、そう謝りかけたアラクセイトだが、青年は最後まで続けさせてはくれなかった。
「ほれ」

意味不明の台詞とともに、彼はずいっと手を差し出し……否、つきだしてきたのだ！
きょとんと首をかしげてしまったアラクセイトに、彼が告げた言葉は簡潔そのもの。
「貸してみろ。火打ち石なら使い慣れてる……このままお前にまかせとくと、いつまで待っても飯にありつけそうにないからな」
代わりに火をつけてやると言われ、アラクセイトは思わず目を瞬かせてしまった。
そんなことを申し出られるとは、正直想像もしていなかったのだ。
「もしかして……実はやさしいところもあるひと、なんですか……？」
……失礼な問いであった。
はたして、ガネルオージェは途端に顔をしかめた。
「お前、本当は性格悪かったりしないか？」
これにはアラクセイトも憤然と言い返した。
「あんまりびっくりしたから、つい本音がこぼれただけです！」
これも大変に失礼な言葉だったが、彼女はこの好機を逃すつもりはないようだった。
「お前な……」
ぼやく青年にさっさと火打ち石を押しつけると、そのまま駆けだしたのである！
「おいっ!?」



慌てる声を背後に聞きながら、アラクセイトは叫んでいた。
「すいませんっ！　火、起こしといてくださいっっ！」
そうして、ただ一方向を目指して走った。
とても、イヤな予感がしたのだ。
それは、理屈ではなかった。

風霊が……イーオダールの子供たちが騒いでいる。
胸騒ぎを覚えながら、アラクセイトは親友の姿を探した。
ソラミイノが屋敷を抜け出して以来、ずっと感じつづけてきた不安が、胸の中でどんどん大きくなっていくのを感じる。
なにがどうとは、はっきり言えない。喉元まで出かかっているのに、それがなんという言葉なのか、どうしても出てこない——そんな感じと似ていた。
もどかしい。
答えはすぐそばにあると感じるのに、肝心のその答えが見えないのだ。

（なんだろう……なんだか、なにかに邪魔されてるみたいな……？）

だが、そんなはずはない。

自分たちはただの『聖石の子供』にすぎないのだから。

そんな大変な事態に巻き込まれるはずがないのだから。

（あ、でも、ミイノはきっと使徒さまに選ばれるだろうし、ガネル……さん、も、絶対なるだろうから、言い切れないかもしれないけど……）

その可能性を、決して自分に当てはめようとはしないのは、謙遜でも怯懦でもない。

アラクセイトはそんなことはありえないと信じているのだ。

だから、このときも自分以外の連れたちのために心を痛めた。

（そう……そうなんだわ。ミイノを狙って、なにか得体の知れない力が働いてたっておかしくはないんだ……）

なにしろ、彼女は砂金水晶の子供であるばかりか、月神の加護を受けた兄を持つ身の上なのだから。

そしてソラミイノは――突然姿を消したその兄の行方を捜し……そして、なにかに引き寄せられるかのように南を目指している。

（なんか……拙いような気がするんだけど……）

その正体がわからない。
（うーん？）
なんともまだるっこしい。
けれど、切迫感を感じるのだ。
だから、アラクセイトは走るのだ。
とにかく、よくない予感がするのだ。
彼女が動くのに、それ以上の理由はいらなかった。
必死で探した。
そして、見つけた。
ソラミイノは、大地そのものの上に正座し、瞑想していた。
神殿で教えられたそのままの——模範的なやり方で。
その身を包むのは清浄なる気——その魂が反応するのは、正しき神々の呼びかけに対してのみ——。
事実、彼女の周囲に現れた輝きは、そうとしか思えぬ美しいものだった。
けれど——アラクセイトには……彼女だけにはわかったのだ。
これは、違うのだ、と。

瘴気ではない。まばゆいまでの月光だった。
本来なら、神の祝福を約束するはずのそれが、なぜか、とても恐ろしいものに感じられて仕方なかった。
思わず、駆け寄りながら叫んだ。
「だめぇぇぇっ！　ミイノっっっ！」
月光がたちまちのうちに消失したのは、次の瞬間――。
瞑想を邪魔されたソラミイノが、怒りに燃える瞳をアラクセイトに向けていた。

13

ソラミイノはかんかんに腹を立てていた。
元凶はもちろん、親友の少女である。
（まったく、なにを考えてるんだか……もう少しでワレン兄さまの気配をたどれそうだったのに……）
その寸前に、アラクセイトの邪魔が入ったのだ。
あんまり腹が立ったので、置きざりにしてきてしまった。
怒られて沈んだ様子の親友は、どこか子犬を思わせたが、その程度で静まる怒りではなかったから、敢えて知らんぷりを通した。
（たまにはいい薬だわ。いつもいつも甘い顔はしてられないわ）
そんなことを思いながら戻ったソラミイノは、たき火のそばに、いま、二番目ぐらいには会いたくないと思っていた青年の姿を認め、顔を顰めた。

「なぜ、あなたがナイフを握っているのかしら？」
尋ねる声がつい棘を孕んだ。
先日、悪党たちから助けてもらったことには一応感謝しているものの、その際見せたガネルオージェの技量ゆえに、別の意味での警戒心を抱いてしまったせいだ。
彼が金剛石の子供であることは疑いようのない事実だ。彼が師匠である青玉と紅玉の使徒たちから破門されたのも……まあ、嘘ではなさそうだとも思う。さらに、そんな彼が自分たちに近づいてきた目的が、自らの力の暴走を抑える効力を持つ、師匠たちの『子供石』を譲り受けるためであることも、信じていいことだと認識してはいる。
だが、はたして本当にそれだけなのか――という疑問を抱かずにいられないのは、ソラミイノがアスカニーリ神殿に深く関わる一族に生まれたせいかもしれない。
決して表沙汰にはできない存在を、神殿は抱えこんでいる――ソラミイノはその幾ばくかを知っていた。
パルムローリの剣と呼ばれる存在がいることを。
聖石の子供、あるいは使徒でありながら、喪月神に翻身した者を抹殺する狩人――暗殺者。
その任につくのは、使徒のなかでも抜きんでて優秀であるか、あるいはよほどに特殊な能力を持つ者に限られると聞いた覚えがある。

いまだ自らの力を十全に制御できずにいる点を除けば、ガネルオージェという青年は、それらの条件を満たす存在だと思えてしまうのだ。

もちろん、確証はない。だが、そうではないという証拠もないのだ。

そんな青年の作った料理に、無邪気に手をだせるはずもなく……。

ほとんど八つ当たり的な怒りがまたしても湧いてくる。向かう先は、もちろん、紫紺の髪の親友である。

（そりゃあ、そのへんの事情はあの子には伏せてたけど、でも、普通、殺されかけた相手に料理させようだなんて思うかしら!?　信じられないわ！）

収まりどころのない怒りは、どんどん飛び火して広がりつづける。

そんな彼女の心中も知らぬ様子で、ガネルオージェは不機嫌に応じてきた。

「なんでって、あの小娘がひとに火打ち石押しつけて飛び出したからだろうがよ。こっちは、あんまり不器用な手つきだから、火だけでも点けてやろうって思っただけだっていうのに、さっさと逃げだしちまって……いいかげん、腹も減ってるんだ。待ってたらいつになるかもしれない飯なら、手っ取り早く自分のぶんだけでも作って食っちまおうとか思わねえか？」

「……それで。自分だけ先に食事してしまおうと考えたわけ？　呆れたものだわ。信じられないったら」

皮肉たっぷりにそう言ってやると、青年は逆に意外そうに目を瞬かせて、こう返してきた。
「お前、矛盾してるぞ？　あの小娘ならともかく、お前はおれの作った飯なんぞ絶対口に入れるつもりはないんだろうに。そのくせ、自分の分の飯を俺が作らないことを責めるのか？　そいつはちょっと筋違いじゃないのか？」
それは言われるまでもなくわかっていることだった。
ただし、わかっているのと感じることは違う。別物だ。
「だからといって……」
と、そうつづけようとしたソラミイノに、ガネルオージェは一番触れて欲しくない部分に突っこんできた。
「そういや、あいつはどうした？　一緒じゃなさそうだが……？」
「知らないわよ、そのへんにいるんじゃないの？」
そっぽを向いて答えたのは、やはりまだ、怒りが静まらずにいたせいだ。
もう少しのところで、行方知れずになっている兄の気配をたどれそうだったというのに、アラクセイトの大声のせいで、なにもかもが台無しになってしまったのだ。
悪意がないからと言って、すぐに許してやる気分にはとてもなれなかった。
「ずいぶん、お冠なご様子で」

青年の言葉に、ソラミイノはぴくりと眉を震わせた。
「……なにが、言いたいのよ？」
最近、神経に障ることが増えた、と思う。
けれど、それは多分に目の前にいる青年のせいだと思ってきた。
本当はそうではないことを薄々気づいてはいたけれど、わかっていても認めたくないことはあるものだ。
漠然とした不安と、明確なそれ——ふたつが一緒にある場合、目が向きやすいのは後者に決まっている。殊に前者を正視したくないと、少しでも考えているときには。
意識せずとも……無意識がそれを選ぶ。
そんな彼女の心中を察しているのかいないのか、ガネルオージェは意味ありげな微笑でこう応じた。
「べつに……。おれも決して人のことは言えないが、人間、多少の余裕は必要だって思っただけだよ」
猛烈に腹が立った。
余裕がないと言い切られているも同然だった。
そのせいで、焦り、神経質になっている、と——。

気にくわない相手に図星を指されるほど腹立たしいことはない。
「本当に、自分のことを棚に上げまくった発言ではあるわよね」
嫌味返しとばかりにそう返したソラミイノの前で、ガネルオージェは深いため息をつき、そうしてやおら立ち上がった。
「な、なによ!?」
一瞬、暴力を揮われるのではないかという彼女の不安は、あっさりと払拭された。
ガネルオージェは、難しそうな顔のままではあったものの、暴力の気配ひとつ窺わせることなく、ため息まじりにこう告げてきたのだ。
「あんたらの関係がどうであれ、いまのあんたらの状況がどうであれ、そのことにあれこれ口出しする気なんぞ皆目ないんだがな。どうも、いまのあんたが近目になってるのは間違いなさそうだ」
「近目？」
「視野が狭くなってるってことだ」
自覚はなかった。
けれど、指摘されたことでそれが生まれたのも事実だった。
（ああ、イヤなやつだわ……）

実のところ、負ける相手はひとりで充分だと思っているソラミイノだった。
そして、すでにひとりめは存在しているのだ。
ふたりめは、いらない。
絶対に、いらない。いや、許さない。
そう思っているというのに、なぜ、ガネルオージェが主導権を握ったかのような言動をとるのか……腹立たしいことこの上なかった。
「なにを……偉そうに……っ！」
そう叫んだ瞬間、青年の灰銀の双眸に宿った光に、ソラミイノは一瞬言葉を失った。
そこには、形容しがたい複雑な感情の色が揺らめいていたのである。
ガネルオージェは真摯な顔で、口調で告げた。
「お前は愚か者じゃない。そう感じたから、言うぞ？」
有無を言わせぬ迫力に、飲まれた格好でソラミイノは目を瞠った。
「あの小娘が連れ去られそうになった経緯は、あんたもわかってるよな？　夢からの搦め手だ。喪月神じゃない。だが、それがたとえ神々であろうと、あんな乱暴な手口に走るやつらがまっとうなはずがない。百歩譲って神々に正義があるにしても、だ。あんなやりかたをつづけられたら、生身の人間はもたないぜ」

なんと不遜なことを言う男なのか――。

ソラミイノは最初、そう思い、しかし次の瞬間、彼の言葉に宿るある種の正しさに気づいた。

神々の力は圧倒的なものだ。いつもの気遣いを神々がふと忘れてしまったとしたら……あるいはそれだけの余裕を失うような事態に見舞われてしまったとしたら……？

人間は、彼らの十全の力を受け入れるには脆弱すぎる。

喪月神のように、こちらに悪意を抱いていなくとも、神々の意志は、ただびとにとっては強烈な毒ともなり得るのだ。

そして、それだけではない。

アラクセイトは以前、喪月神に拐かされ、命を狙われたことがある。

また狙われないという保証はどこにもないのだ。

そんな彼女をひとり置き去りにするなど、確かに考えなしなことだった。

しまったと思ったけれど、ソラミイノはすぐに踵を返す気になれなかった。よりにもよってガネルオージェに指摘されたのが癪だったし、正直なところ、アラクセイトと顔を合わせたくなかったのだ。

自分でも、狭量だとはわかっている。

（でも……すぐにはあの子の顔は見たくない……）

そんな彼女の心中を見抜いてか、ガネルオージェはなにも言わずに、彼女の来た方へと歩き出したのだ。

一緒に来いと言われなかったことに安堵する一方、彼とアラクセイトをふたりきりにしていいものかどうかという不安も覚え、ソラミイノはきゅっと唇を噛みしめた。

（どうするべきなのかしら）

いくら自問しても答えは出なかった。

代替案を出してくれたのは、黒髪の青年だった。

「当番じゃないだろうが……飯でも作っててくれると助かるよ。三人中、あんたの作る飯が一番美味いからな」

ソラミイノへの気遣いなのか、それとも単なる本音なのか——見抜けないのだ。

なんて厄介な相手、と彼女は思った。

伊達に自分たちより年上ではないということか。それはそれで、また腹立たしい。

違う。

一番、歯がゆく思っているのは無力に等しい自分自身のことなのだ。

自分のことを、万能だなどと思ったことはない。そんな妄想を抱けるほどに彼女は自信過剰

ではあれなかったし、師匠たちやその御同輩の力を目の当たりにした上で、そうと思えるほど、無知でもあれなかった。

だが、ストリーヴの屋敷を飛び出す以前は、もう少しは自分にできることは多い……いや、自分はもう少しは出来る、と思っていたのだ。

けれど、そんな自信は、瞬く間に崩れてしまった。

自分が世間知らずであることを認めるのは、勇気の要ることだ。

それまで培ってきた経験や自信――すべてが無意味なものに変わってしまう……それを目の当たりにするのは、快いものではない。

ようやくの思いで答えた。

「わかったわ……」

と――。

悔しいやら苛立たしいやら面倒くさいやら、さまざまな感情が入り乱れて、うまく制御できなかった。

（いつからわたしは、こんな、癇癪持ちみたいに短気になってしまったのかしら？）

そう自問するソラミイノの脳裏で、何かが、引っかかった。

（いつから……!?　いいえ、そうじゃない。そうではなくて……）

そのまま、自問の答えを求めようとした彼女はしかし、掛けられた声ゆえに見いだしかけた糸口を見失ってしまった。

「おいっ！」

呼ばれて、声の主を振り返った瞬間、彼女の意識は逸れてしまった。

「なに？」

「なんなら、気休めでも、お守り代わりにおれの子供石、置いて行こうか？」

「結構よ！」

とは、即答だった。

信用できない人物の『子供石』など――しかも、その石ときたら、最強の力を誇る金剛石なのだ！――とても受け取ることなどできない。

使徒に選ばれてもいない身では、荷が勝ちすぎるのだ。

聖石の子供石には、それだけの力が宿っている。

「いいから、アークを捜してきてちょうだい。……粥に、あの子の好きな鮭の焼き身、ほぐして入れてあげるからって」

「鮭粥か……そいつはおれも楽しみだな」

笑いながら、ガネルオージェが駆け去っていく。

（なんだかなあ……）

と、ついソラミイノは考えてしまった。

（ほのぼの路線につきあってる暇はない……はず、なんだけど……なあ……？）

いらいらしたり、和んだり、自分でもよく自分を摑めない。

よくない、兆候だ、と思った。

そして実際、それはよくない兆しだったのだ。

水鏡を見つめながら、「ふん」と鼻を鳴らす存在があった。

彼は、それまでの推移を見つめつづけてきた者だった。

それでいて、年長者たちのやりように、もどかしさを覚えつづけてきた者でもあった。

用心深い——と言えば聞こえの良い、その実、消極的すぎる年長者たちのやりかたに、これまで不満を訴えるわけでもなく、彼は大人しい羊を演じつづけてきた。

なぜか。

簡単である。

仰ぐべき主そのひとが、いまだ姿を明らかにしていなかったから、だ。
主不在の組織は窮屈そのもので、思想自体には感銘を覚えたものの、運営の旧弊さにはうんざりさせられていた。
新世界を創るのだ――。
高邁な理想を掲げながら、その方策や認識が、『彼』のそれと重なることはついぞなかった。
なかば失望しかけたころ、奇跡のように、『主』は降臨したのである。
美しく、若々しい主――。
理想としていた、絶対の主――。
（この方をこそ、わたしは待っていた……！）
もう、息を潜める必要はない。
いや、今こそ、全能力を以て訴えかけるべきとき――！
そう確信し、『彼』は微笑んだ。
「まずは邪魔者を排除しよう……」
遅かれ早かれ、それは必要なことだとわかっていた。
「うん。やはり、そうしよう」
うなずきながら、『彼』は微笑んだ。

主の命令は絶対だった。
だから、あの砂金水晶の子供である少女には手が出せない。
けれど、それ以外の存在であれば――。
「かまわない、よねえ……？」
くすくす、くすくすと『彼』は笑った。

14

（まいったなあ……）

などということを考えながら、アラクセイトは草地に座りこんでいた。

（怒られちゃった……）

誰に――か？

もちろん、ソラミイノに、だ。

ソラミイノが――親友である少女が、必死に行方知れずとなった兄であるひとを探していたことは知っていた。

だから、できるだけ邪魔すまいと……思ってはいたのだ。

もっとも、そんなことを口に出そうものなら、『そう思うのなら、今からでも遅くはないから、帰ってちょうだい』ぐらいのことは言われそうで、だからソラミイノに言ったりはしないのだけれど。

それでも、アラクセイトはアラクセイトなりに頑張ってきたのだ。決して騒ぎを起こさぬよう、決して能力を暴走させぬよう……。

どうしても、ソラミイノをひとりにさせたくなかったからだ。

その決断は間違っていなかったと思う。現に、先ほど彼女の全身を包んでいた、あの光と気配からは、よくない感じがしたのだから。

問題は、そのことをうまく説明できないことなのだ。

あの気は、確かに瘴気ではなかった。月神気に一番近い感じがした……ソラミイノ自身、そうだと信じて疑っていなかった。

けれど――アラクセイトにはどうしても、そうは思えなかったのだ。

（何かが違う……すごく強いし、邪気なんてかけらも含んではいなかったけど……でも、あの感じは……）

なにかに似てる――そう思い、彼女は一所懸命、なにに似ているのか、思い出そうとした。

そして、気づいたのだ……それが、先日見たあの悪夢のなかで感じたモノに酷似していることに！

作りかけの箱庭のような、生の気配と色彩に一切欠けたあの世界――水も緑も失せた大地に、ひとりたたずみ、微笑んでいた銀髪銀瞳の自分……。

その夢に囚われそうになっていたとき、自分の体は銀の光に包まれていたと、ガネルオージェとソラミイノは言ってはいなかったか？

そして、ガネルオージェはこうも言っていた。

『喪月神だって、以前は月神だっただろうがよ』

それを聞いたときには、幼いころ、夢を媒介に攫われ、殺されそうになったことを思い出して、恐怖に震えてしまったのだけれど……。

（だけど、そのことは、もっと深く考えなきゃいけないのかもしれない……。もちろん、月神気と瘴気が全然違うモノだってことははっきりしてるけど）

けれど、おかしいといえばおかしいのだ。

月神――サラムトーリは、ほとんどと言っていいほどに、この世界……バルヴァローズに力を届けたりはしないのだ。ふたりの兄たちの歪んだ気配の影響を避けるためとも、非常に近しい気配と力によって、逆に喪月神の瘴気を活性化させないためとも言われているが、神ならぬ身に、真実は読み解けない。

だが、それが本当のことだとすれば、ここ最近自分たちの周囲で起きている月神がらみの事態の多さはどう説明できるというのか。

五年もの間、行方知れずとなっていたソラミイノの兄ワレンアイノの奇跡的な生還――。自

分の見た、あの恐ろしい夢。そして、先ほどの……瞑想する親友の全身を包みこもうとしていたあの月光。

イヤな……予感だけが、胸の奥で大きく育っていく。

（考えすぎ……そうよ。考えすぎ、なんだわ……）

きっとそうに違いないと、アラクセイトは自身に言い聞かせようとした。

けれど、そうしようとすればするだけ、胸の動悸が激しくなった。

まるで、宿題をさぼった子供に、罰が与えられるかのように。

それともそれは、単なる後ろめたさがもたらしたモノだったのだろうか。

「わけがわからないったら……」

そうつぶやきながら、アラクセイトは実はそうではないことを認識していた。

多分、答えに至る手がかりは、すでに与えられているのだ。だのに、肝腎の答えだけが見つからない。

苛立っているのはそのせいだった。

だが、別の理由もあった。

読み解きたくない問題を前にして、アラクセイトは立ちすくみ、駄々をこねていたのだ。

読み解いた場合、見えてしまう『答え』を見ないために。

見たくない、と――そう思っていたがゆえに。

「わたし」

ふうう、と大きく息をつきながら、アラクセイトはぽつりとつぶやいた。

「なにを、見逃してるのかな……？」

それとも、とも彼女は思った。

なにから目を背けようとしているのか、と――。

そんな彼女の目の前で、異変が生じたのは次の瞬間のことだった。

大地から、凄まじい『力』としか表現できないものが噴き出したのである！

彼にとって、それは簡単なことだった。

造作もないことと言ってもいいほどに、彼はその行為に馴染んでいた。

必要なものは力だ。

力など、そこいらじゅうに散らばっている。

石ころひとつだとて、存在するというだけで、すでに力なのだ。感情も音色も声も言葉も

……この世に存在する――それだけで力となる。
彼はそんな力を自在に操り、形作ることができるのだ。
浮き浮きした気分で、彼は材料を吟味し、『作品』をイメージする。
幸いなことに、そこには衝動的ながら、強い怒りが残っていた。
手出しを禁じられた、あの白金の髪の少女のものだ。
塑像家が、土台や芯に粘土を載せ、作品を形作っていくように……否、子供が粘土遊びを楽しむかのように、彼はそれを作り上げた――瞬きひとつするほどの時間で。
「眼は緑がいいな。毛並みはもちろん白金で……金の縞がいいな、皮肉が効いてて」
なにより綺麗だとつぶやいて、彼は微笑んだ。
彼はその姿を脳裏に思い浮かべるだけでいい。
彼が満足を覚えたその瞬間、それは誕生するのだから！

「な、に……これっ!?」
黄橙色の双眸を、これ以上はないというほどに瞠って、アラクセイトは呆然とつぶやいた。

それも無理からぬことだった。なぜなら、彼女が今目にしているもの——それは彼女が生まれて初めて目にした存在だったのだから！

いや、たとえ目にしたことがなくとも、話に聞くなり、書物のたぐいで知っていたならば、彼女もそこまで呆然とはしなかったかもしれない。

だが、アラクセイトがこのとき対峙したもの——それは、彼女がこれまで見たことも聞いたこともない……さらに言えば、実在するはずのない存在だったのだ！

その毛並みは極上の白金、砂金を散りばめたかのように走る縞が美しい。

ふたつの瞳は深い緑——。

姿は、狼に、似ていた。

とても、美しい獣だった。

（けれど、違う！）

アラクセイトにはわかってしまう。

それがこの世——バルヴァローズに息づく存在ではないことが！

月光そのものを纏う獣がいるはずがない。

では、だったら、この獣の正体とはなんなのか!?

（まさか……聞いたことないけど、神獣、だとか……？）

そんな存在があるなどとは、聞いたこともなかった。
けれど、目の前の現実を目の当たりにしてしまっては、すぐさま否定できるわけもない。
しかも……信じがたいことに、月光を纏った神獣とおぼしき狼――実はそうではないのだが、ほかに表現のしようがないため、これで通すこととする――は、敵意も露な目を、アラクセイトに向けていたのだ。
「ど、どうして……？」
自分がこんな目で見つめられなければならないのか。
拒む、目。
断罪する強い意志をこめた、視線――。
一方的にこんな目を……意識を向けられる覚えもなければ筋合いもなかった。
アラクセイトはここ数年の劣等生環境のせいもあってか、確かに多少周囲に対して萎縮する傾向はなくもなかったが、それでも彼女は根幹の部分では、勝ち気で負けず嫌いな少女でありつづけてきたのだ。
だが、その狼の向けてくる視線に対しては、なぜか彼女は反発を感じることが出来なかった。自分に非があるような……そんな気分にさせられたのだ。
けれど、それも長いことではなかった。

狼が、牙を剝き、彼女に襲いかかってきた瞬間、アラクセイトは紛れもない狼の殺気を感じ取り、それと同時に身を守るための力を放ってしまったのだ！

灼熱の炎が、白金の狼に襲いかかった！

しかし、その炎は、狼を焼き尽くすどころか、傷ひとつおわせることはできなかったのだ！

「うそ……やだ、どうしよう……」

狼の緑の双眸に宿る殺気は、より強いものへと変化していた。

燃えたぎるかのような――殺意。

間違いなく、狼は彼女の命を欲していた。

そして、アラクセイトときたら、それが謂れないものだと、なぜだか思えなかったのだ。

思い当たる節などない。

月神サラムトーリの不興を買うような真似をした覚えはない。

けれど、目の前にいる不思議な獣は、断罪する目を自分に向けている。

（なんで……こんな……!?）

こんなことになったのか――!?

（わたし、わたし……神々に背くようなこと、してない。絶対に、誓って、してないのに……どうしてこんなことに……!?）

これが邪気や瘴気の攻撃であったなら、アラクセイトもここまで混乱することはなかったろう。

また、本当になにひとつ懸念するものを抱えていなければ、あるいは彼女は女神の使徒を前にしたからといって、ここまで無防備にはならなかったに違いない。

だが、彼女には不安があった。

先日、見たいとも思わず見てしまった……恐ろしい悪夢が！

正確にいうなら、そのなかで——荒れ地と化した大地に佇み、婉然と微笑んでいた自分自身の姿に、彼女は言いようのない不安を覚えていたのである。

恐ろしい夢、怖い夢——。

なにより恐ろしかったのは、夢の中の自分だった。

命の気配のかけらも感じられない世界で、満足そうに……嬉しそうに笑っていた、夢の中の自分自身。

あれこそが、アラクセイトが最も望まぬ自身の姿——未来だった。

だからこそ、逆夢とすべく……そうはできずとも、せめて正夢にだけはなってほしくなかったから、ソラミイノとガネルオージェにその夢を打ち明けたのだ。夢はときに未来を暗示するものだが、それはあくまで可能性にすぎず、他者に語ることによって、その可能性を消滅、あ

るいは軽減することができる――という言い伝えにすがって。
（でも……それでも、駄目なの……!?）
そうなる確率は、そこまで高いということなのか。
（わたしは結局あんな風に変わってしまうことが決まっているから……だから、サラムトーリはわたしを抹殺すべく、神獣を送り出した……？）
だとしたら、これは神意なのだ。
絶望がアラクセイトを襲った。
死にたくなどなかった。
けれど、それ以上に、あの悪夢の中の住人に、彼女はなりたくはなかったのだ。
狼が、身を低くした。
一発必中で、自分の命を奪うつもりなのだと、誰に教えられることなく、アラクセイトは悟った。
死にたいわけでは、決してなかった。
ただ、動けなかっただけなのだ。
神意に背くことを恐れるがゆえに――？
否。

確実なるやもしれぬ未来において、自らが自らの望まぬ役所を演じることについて、だ。

（それぐらいなら、いっそ、わたしは死んだほうがいい……）

そう思い、その瞬間を待った。

……結局、その瞬間は訪れなかったのだけれど。

15

大きな衝撃に、アラクセイトは思わずよろめき、膝をついた。
突き飛ばされたのだと理解すると同時に、彼女はそれをなした相手が誰なのかを知った。
「なにをぼーっとしてるんだ、殺されたいのか!?」
出会って以来、一度として改善されたことのない傲慢な口調が、アラクセイトの負けず嫌いの虫の目を覚まさせた。
「だれがっ！」
答えて彼女は声の主を振り返り、睨みつけた。
ガネルオージェが、不機嫌な面もちで彼女を見つめていた。
「なら、なんだ？　腰でも抜かしてたのか？」
実際のところ、それに近いところだった自覚はあったが、そのことを素直に認めるのには抵抗があった。

「そんなんじゃありませんっ！」

背筋がぴんと伸びるような気がした。

同時に気づいた。

いまこそ、しっかりと背筋を伸ばす時なのだ、と――。

アラクセイトは意識的に背中に力をこめた。

そして自分に言い聞かす。

（死にたくないけど、運命なら仕方ない……程度の思いじゃ、駄目）

その程度の思いなら、きっと彼は見抜いてしまう。

そうして、きっと、そんな風に気弱になった自分のことを、彼は揶揄するに決まっているのだ。

台詞まで聞こえて来そうな気がする。

『これだから、温室育ちは……』

きっと、そんな風に言ってくるに違いないのだ。

（冗談じゃないわ）

劣等生と呼ばれるようになって数年になっていたけれど、彼女はこのとき、自分のなかに強い思いが湧きあがってくるのを感じた。

それは、目の前の青年にだけは、馬鹿にされたりからかわれたりしたくないというものだった。

神獣とおぼしき狼に対する、理由のない後ろめたさが薄らいだ。

そうして改めてその姿に目を向けたとき、彼女はなにゆえに自分が、ああまで心引きずられたのかに気づいたのだ。

白金の毛並みといい、緑の双眸といい、その獣は、どこか親友である少女を彷彿とさせるものがあった。ほんの先ほど、その親友を怒らせてしまったせいで、よりその相似性に引きずられたのかもしれない。

その牙の前に身をさらそうという気は失せていた。

それでも、反撃しようとは思いもつかなかった――だから、ガネルオージェが懐から危険なほどに力を宿した刃を取り出したとき、息を呑んだのだ！

それは、とても細い、しなやかな短剣――柄の部分に嵌めこまれた極上の青玉まではっきりと見て取れた。

ガネルオージェの師匠――ナウルニールの生み出した、極上の青玉の子供石――恐らくはあらゆる邪……瘴気を浄化するに違いない短剣は、しかし、白金の狼の身に傷ひとつ、負わせることはできなかった。

ガネルオージェの無謀としか思えぬ行動の結果に、アラクセイトは知らず口元を覆った。
それは、彼女の不安を証明しただけのことのように思えたからだ。
すなわち、正義は獣にあるのだ、と――。
けれど、先ほどまで感じていたような絶望感はなかった。
自分が、滅ぼされなければならない存在だとは思えなくなっていたからだ。
「逃げちゃ、だめなんでしょうか？」
「逃げる？」
心外とばかりに、ガネルオージェが問いかけてきた。
「おれたちが背中を向けた途端、こいつはおれたちに襲いかかってくるぞ？　そんな物騒なやつに背中を見せるのか!?」
論外だと言い切られ、アラクセイトはすぐには次の言葉を口に出来なかった。
なぜといって、確かにその可能性は高そうに思えたからだ。
だが、だからといって、逃げずに事態を収拾できるかといえば、かぶりをふるほかはなかった。神の遣いとしか思えぬ獣をどうしたら退けることができるのか、彼女は想像だに出来なかったし、それが許されることかどうかもわからなかったのだ。
だから、アラクセイトは必死にガネルオージェに訴えたのだ。

「だけど、あれは瘴気じゃないんですよ!?　わたしの炎にも怯まなかったし、あなたの青玉の短刀だって、傷ひとつおわせられないじゃないですか!?」

そんな相手に、どうやって立ち向かおうというのか――!?

だが、彼女のそんな言葉は、青年を苛立たせただけだったらしい。

「ごちゃごちゃうるさいっ！　そう思うんなら、さっさと逃げ出せばいいだろうっ!?　足手まといだ、どこへでも行ってしまえ！」

言葉は悪くとも、それが、自分を気遣っての言葉だというのはアラクセイトにもわかった。

なぜなら白金の狼に襲われたのは自分であり、決してガネルオージェではなかったことを、彼女は忘れてはいなかったからだ。

「いやですっ！」

反射的に叫んでいた。

けれど、ならばどうしたらいいのか――それはわからない。

（どうしたら――？）

悩む彼女の様子から、何事かを感じ取ったのか、ガネルオージェが不意に「そうか」とつぶやいた。

そして、彼は懐から新たな短剣を取り出した。

先ほど揮ったものとはちがう、いかなる石も嵌めこまれてはおらぬ刃を――。

なにをするつもりなのかと、目を瞠る彼女の前で、ガネルオージェは短剣の柄の部分に空いた窪みにもう片方の手をかざした。

と、同時に、そこには無色透明な石が出現したのである！

（金剛石！）

そう、それは彼が生み出した金剛石の子供石だった。

そして、その石が嵌めこまれたとたん、短刀はまばゆい白光を放ったかのようにアラクセイトの目には映った。

（なんて……すごい、力……）

力そのものが凝縮したかのようなその短刀に、切れぬものはなさそうに見えた――そう、たとえそれが神の遣いであろうとも。

と、そこまで考えたアラクセイトははっと息を呑んだ。

まさしくそう思い、ガネルオージェが金剛石を短刀に嵌めこんだろうことに気づいたのだ。

「ガネルオージェさんっ!?」

制止の言葉は、しかし遅すぎた。

青年はすでに短刀を手に、白金の狼に斬りつけていたのである！

（なんてことをっ！）

なんという恐ろしいことを――。

思わず口元を覆った彼女は、しかし次の瞬間、信じられぬものを見た。

（な、なに……!?）

ガネルオージェの短刀によって傷つけられた狼の傷口から、靄のように、瘴気が立ち上っているではないか！

（目の錯覚……!?）

いや、違う。

現にその傷口は瞬く間に塞がったものの、痕は無惨に残っていた。

焼け爛れたかのようなそこからは、じくじくと瘴気が洩れ出ていた。

間違いない。

（月神の気配としか思えない気を放ってはいるけど、あの一瞬洩れ出た気配……あれは……間違いない！）

あれは絶対に、瘴気だった。

（だとしたら……）

「ガネルオージェさんっ！」

ほとんど同時に叫んでいた。
「もう一回、斬りつけてくださいっ！」
両手を組み合わせながら、叫んだ。
両手に、意識を集中する。
炎を、熱を、瘴気を焼き尽くす炎を！
あの傷口が開いたなら――その瞬間に、炎をたたきこむ！
「おうよっ！」
答えてガネルオージェは、再度斬りつけた。
ざしゅっ、と肉を切り裂く音が響いた。
その傷つけられた部分から、流れだした瘴気……。
（よし、あそこから……！）
炎を送りこんで――と、手のひらの間に熱をためていたアラクセイトは、しかし、声にならない悲鳴を上げた。
傷つけられたことに対する復讐心もあらわに、狼がガネルオージェに襲いかかったのだ！
不意を衝かれたせいか、ガネルオージェは狼にのしかかられていた。
大きく裂けた口から覗く牙は大きく、それが彼の喉元に埋められるのは間違いのないことに

思われた。
（どうしよう……!?）
焦りながら、アラクセイトは無意識に周りを手探っていた。
（早く、しなきゃ……早く……なにか……っ！）
武器が欲しかった。
けれど、当たり前の武器では狼に傷ひとつつけることもできはしない。
第一、彼女はそう呼べるものをなにひとつ身につけてはいなかった。
それが口惜しい。
（大きくて、よく切れる刃物があったらいいのに……。ガネルオージェさんが使ってるような短剣でもいいから……ううん、それじゃ駄目だわ。わたしには使えない……もっと大きくて、重いものじゃないと――力が、足りないから）
鉈が、ここにあったらよかったのに――。
それなら、自分にも使えただろうに――と、そこまで考えた彼女は、けれど、それ以上あれこれ思案してはいられなかった。
狼の牙は、いまにも青年の喉笛に突き立てられようとしていたのだ。
「駄目！」

叫ぶと同時に、手になにかが触れるのを感じた。
棒きれかなにかだろう。アラクセイトの手で摑むのにちょうどいい太さで、ずっしりと重みがあった。
棒きれなどが、なんの役にたつというのか——だが、このときの彼女はすでに、そんなことさえ判断できなくなっていた。
「だめぇぇぇっ！」
彼女は立ち上がり、狼に向かって駆けだした——拾ったばかりの棒を摑んで！
（狙うのは、あの傷跡……っ）
まだ完全に塞がったわけではない、ガネルオージェのつけた傷を狙えば、少しは痛手を与えることが出来るかもしれない。狼を、彼の上から退かせればいいのだ。
神々の遣いかもしれない——という思いは、アラクセイトの脳裏から綺麗に消え去っていた。瘴気を裡に抱えたモノが、神の遣いであるはずがないのだから！
「ガネルオージェさんから、離れなさいよっ！」
大声で叫びながら、アラクセイトは狼に殴りかかった！
だが、次の瞬間、その行為の意味が変化した。
ただの棒きれにすぎなかったはずのそれに、厚みのある刃の部分が出来ていたのだ！

無色透明な――石でできた鉈の刃が……。
なにがどう作用してこんなことが起こったのか――けれど、いまのアラクセイトには、そんなことを考えている余裕はなかった。
「退きなさい！」
叫び、鉈を振り下ろす！
狼の白金の毛皮が、ざっくりと裂け、そしてその内部から、すさまじいばかりの瘴気が噴き出した！
それを認めるなり、彼女は体の奥から溢れ出てくる力のままに、再び叫んだ。
「燃えてしまえっっっ！」
どす黒い靄のような瘴気が、緋色の炎に包まれたのはほとんど同時のことだった。
後に残されたもの――それは。
この上なく高価ながら、かけらほどの芸術性さえ認められない、金剛石の刃がついた無骨な鉈、と――。
「おい」
そろりと起きあがったガネルオージェが、なんとも形容に困る表情で問いかけてきたとき、当然のことながら、アラクセイトには答えられなかった。

「これは、なんだ？」

「な、なんでしょう……？」

白金の毛並みと緑の双眸の子犬――もしくは子狼とでも呼ぶしかなさそうな生き物が、尻尾を嬉しそうに振りながら……アラクセイトとガネルオージェのふたりを、見上げていた。

16

この上なく冷ややかに、事の次第を尋ねられ、アラクセイトとガネルオージェはたがいに顔を見合わせた。

「で……？」

「で……って言われても……」

「……なあ……？」

別段、気の合う相手同士というわけでもなし。

特別に守らねばならない秘密を共有しているというわけでもなく。

ただ、質問者――ソラミイノの、かなりというか、結構な迫力を前にして、つい、その役目を相手に押しつけようと……消極的ながら互いに動いた結果、そうした動きにたいそう敏感な相手に、急所を押さえつけられた――というのが正直なところだった。

しかし……まあ、それはある程度仕方のないこと、ではあったのだ。

なぜならそれ――白金の毛並みの子狼もどき、もしくは子犬もどきの正体を、ふたりはともに把握出来ていないどころか、想像さえできずにいたのだから。

「質問の意味がわからない？　なら、きちんと聞いてあげるわ」

にこにこ、にっこり――微笑んで、ソラミイノはずずいっと、尻尾をはたはた振っている子犬（もどき）を指さした。

「これは、いったい何なわけ!?」

その毛並みは白金、双眸は緑――さらに、砂金を散りばめたかのような金色の縞模様があるとなれば、怪しいどころの話ではない。

「あー、それは……」

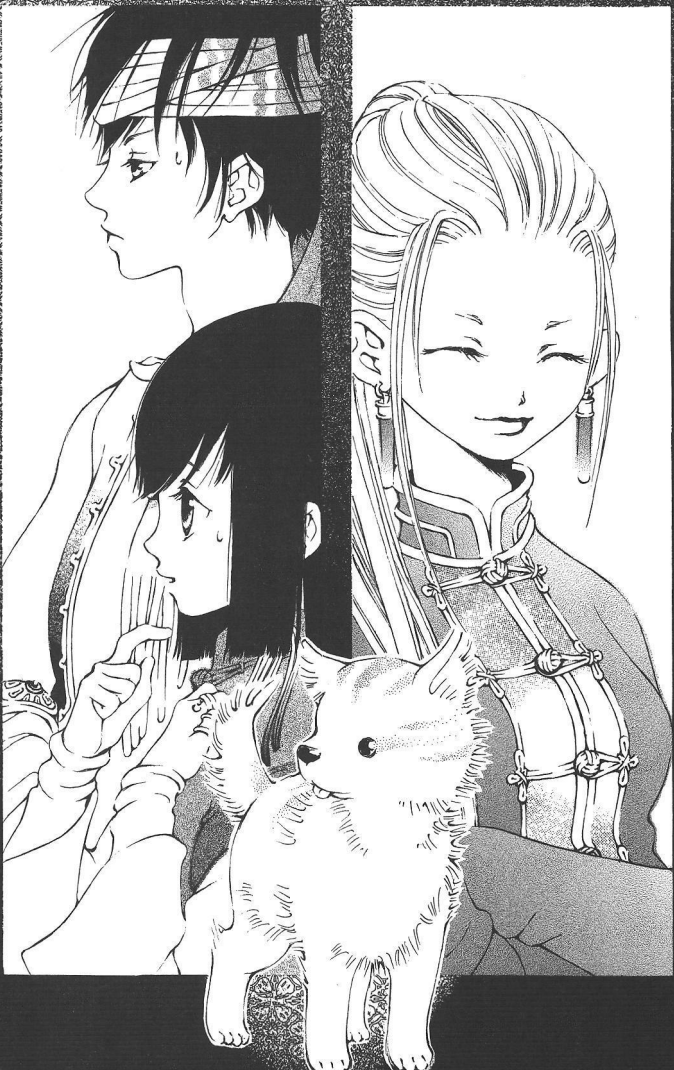
「ええっと、ねえ……」

ガネルオージェとアラクセイトの二人は実のところ、いまだ状況の把握がままならずにいただけだったのだが、答えに詰まったふたりの様子に、ソラミイノは徹底追及の意志を固めてしまったらしい。

「いったい、なにがあったのかしら？」

もちろん、答えてくれるわよねえ――。

という、副音声たっぷりに、彼女は尋ねてきたのである。



「勿論、先ほど盛大な火柱が、あなたたちのいた方で上がったのは知ってはいるけれど？」

だめ押しである。

要約するなら、『きりきり白状しろ』といったところか。

先に口を開いたのはガネルオージェだった。

「ああ、だからな……」

そんな彼の声を遮るように、声を上げたのはアラクセイトだった。

「あ、あのねっ！」

かくかくしかじか——こういう事情だったのだと、説明したまではよかったのだが……いかんせん、その後がよろしくなかった。

「つまり。こんな風に小さく縮む以前は、これは凶暴なまでに大きくて、アークを襲おうとしていたわけなのね？」

ソラミイノの声は、心なしか震えていた。

（あ、まずい）

と、アラクセイトが思った次の瞬間、ソラミイノが怒りを爆発させた。

「なぁんだって、そんなものをつれてくるのよっ!?　あなたたちには危機感というものがないの!?」

たいそうな剣幕だった。
「え、と……別に連れてきたわけじゃぁ……ねえ？」
「ああ。勝手についてきたんだ」
この件に関しては共犯関係にあるガネルオージェは、きちんと援護してくれた。
しかし、そんなことぐらいで、ソラミイノの怒りが鎮まるはずもない。
彼女はきつい眼差しをふたりに向けると、それはそれは冷ややかな声で問いかけて来たのである。
「ついてきたから仕方ない、なんて戯言言うんじゃないでしょうね？　しかも、こんな得体の知れない……瘴気を宿していたんでしょうっ!?」
冗談じゃありません――もといた場所に戻してきなさい！
飼えないとわかっているのに子犬――子猫の場合もあり――を拾ってきた子供に対する母親よろしく、はっきりとそう言い切った彼女に、親友である紫紺の髪の少女は困惑顔で答えた。
「置き去りにしても、どういうわけだか、すぐに追いついてきちゃうのよ」
ねえ？　――と、黒髪の青年にふる。
両人ともに不本意なことではあったが、この子犬もどきの持つ不可思議さを共有しているのは互い以外にはいなかったこともあってか、このときのふたりの息はぴったりだった。

「ああ。どう考えても普通の、当たり前の動物とは違うだろうから大丈夫だろうってことで、首に紐をつけて、適当な木に繋ぐことまでやったんだがな。手品でもこうはうまくはいかないだろうってぐらい、あっさり追いつかれるんだ」

「あのね。あのね、ミイノ。嘘じゃないの、本当にそうなの。まるで、わたしたちがどこにいるのかわかってるみたいに追いついて来ちゃうの！」

力説するアラクセイトに、「だからこそ、怪しいんでしょうがっ」とソラミイノは語気を荒げたが……先ほどまでの怒髪天を衝く勢いは、なかった。

「怪しくはない……と思う……。だって、瘴気は綺麗に完全に燃やしちゃったし……それでも……姿は変わっちゃったけど、平気でぴんぴんしてるってことは、もしかしたら、これがこの子のありのままの姿なのかもしれないし……」

「どこの世界に、こんなけったいな生き物がいるっていうの!?」

「だって、月神気帯びてるし……まだ小さいから、瘴気に蝕まれていいように操られてただけなのかもしれないし……。ガネルオージェさんからも聞いたけど、普通の生き物が喪月神の瘴気を宿したら、浄化してもまず命は助からないって話なのに、その子ってば元気有り余ってる感じだし……だったら、その子って、元々が月神の加護を受けた子じゃないのかなあって」

思ったんだけど――。

「それはあくまであなたたちの楽天的な想像……というか、期待でしょう!?　いいえ、百歩譲って、これがそうした存在なのだと認めるにしても、よ？　こんなに目立つもの連れて、旅するわけにはいかないでしょうがっ！」

だから、捨てて来なさい――そう言おうとしたに違いないソラミイノの機先を制したのはガネルオージェだった。

「だったら、あんたが捨ててきたらどうだ？」

責任を他人に押しつける発言――とも受け止められかねぬ言葉に、はたしてソラミイノは「どうしてわたしが!?」と噛みついた。

だが、ここで意外にもアラクセイトが加勢した。

「そうよ。ミイノが駄目だって、連れて行けないって思って、そう言い聞かせたら、緑ちゃんも納得するかもしれないし……」

うんうんと、ガネルオージェもうなずいた。

「そうだな。あんたがいらないと言えば、シロも無理について来ようとはしないかもな」

「なんなのよ、その緑ちゃんとかシロとかって……!?」

「え？　だって、目が綺麗な緑だから」

「毛並みが白いから……だが？」

「ああ、いえっっっ！　そういうことじゃなくってっっっ！　なんだって、わたしなの!?　拾ってきたのはあなたたちでしょうっっ!?　どうして、わたしに一番イヤな役目を押しつけようとするわけなのっっ!?」

　このときも……ふたりの連携は完璧だった。

「だって――」

「……なあ……？」

「なによ」

　拗ねたように問いかけたソラミイノに、アラクセイトが恐る恐るといった様子で答えを返した。

「だって、緑ちゃん、ミイノに一番、なついてるんだもの」

　それは……確かに事実だった。

　白金の毛並みに緑の瞳、さらには砂金をちりばめたかのような不可思議な縞模様を持つ子犬もどきは、ソラミイノを目にした途端、アラクセイトやガネルオージェなど眼中にないといった様子で、彼女になつきまくり状態になっていたのだ。

　まるで、前世からの絆によって結ばれていたかのようなつきぶりだった。

　そして……どうやらそれは、一方的なものではなかった――らしい。

翌日のこと、ソラミイノは苦い顔で、どこまでも無邪気に自分を慕ってくる子犬――もどき――に名前をつけた。
砂金、と――。
以降、それ以外の名前に、件の獣が反応することはなくなった。
かくして、旅を続けるにあたり頭数が、ひとつ増えたというわけだ。

くすくす、くすくす――。
事態の成り行きを、楽しみながら眺めている人物がいた。
「なんともまあ……おかしなことが起こるものだ」
つぶやきながら、かきあげる髪は銀――。
つぶやく声は未だ成長しきれぬ少年のものだった。
そんな彼の正面に、膝をつく者がいた。
「申し訳……」
深く、深く頭を垂れ、その人物――灰銀の髪の青年はつぶやくように告げた。

「いいよ」

と、答えたのは銀の髪の少年だった。

銀色の双眸には、楽しげな光が宿っている。

「かまわないよ」

もう一度つぶやいて、少年は鏡の映す映像に目を向けた。

そこで起こっていることこそが、なによりの楽しみだと言わんばかりに。

「おまえが謝ってるのは、先走ったことに関してのことだろう……？　なら、必要ないよ。おまえの成した行為は、充分にこちらに利する条件を備えている。確かに、あの『月犬』は予想外の産物だけどね、利用できないわけじゃない……なにしろ、核になっているのがあの娘の感情だからね」

ただし——と少年はつづける。

「大目に見てあげられるのはここまでだよ。皆が皆、好き勝手に遊んでくれたら、手に入るものも手に入らなくなってしまうからね」

わかるよね——そう微笑む少年の前で、灰銀の髪の青年はさらに深く頭を垂れた。

「は……」

その肩は心なし震えているようにも見えた。

「なら、もう行っていいよ。そうそう、言い忘れてたけど、お前の趣味は本当にいいね。あの月狼は美しかった……充分に堪能させてもらったよ」
「恐れ入ります」
短くこう答え、青年は言われるままに部屋を出て行った。
扉が閉まると同時に、銀髪の少年が、くすくすと笑い出した。
そんな彼に声を掛ける者がいた。
「楽しそうでらっしゃいますな」
奥の小部屋につながる扉から、姿を現した四十前後とおぼしき男が問いかける。
「ああ、うん、楽しいよ」
あっさりうなずき、少年は銀色の双眸をきらきらと輝かせた。
「本当に、人間というものは面白くできているよね。女神が……姉上たちが授けた異能なんて、聖石ぐらいのものだというのに、人間は勝手にさまざまな力を自分たちで手に入れていくのだもの。いっそ、不思議に思うよ。親愛なる母上といい、姉上方といい、どうして我らなどを危険視なさったのだろうとね。危険度で言えば……」
「御方」
たしなめるような男の口調に動揺の響きはない。

ただ、軽々しく多くを語ることへの警告のそれゆえにか、声は低いものの、驚くほど、よく響いた。

「わかったよ。確かに不用意に言霊を放つのは利口ではないものね。気をつけよう」

うなずいて、少年は再び鏡のなかに視線を転じた。

瘴気という名の傀儡糸から解放された『月犬』は、嬉しそうに飛び跳ねながら、白金の髪の少女にまとわりついている。当然というものだ。本来この世に存在するはずのない命――生き物であるソレが、『生きて』いられるのは、少女の感情――たとえそれが、土地に刻みこまれた残留思念であっても――を核としているからなのだ。

月犬にとって、少女は母親にも等しい存在なのだ。慕わしく思わぬはずもない。

そして、少年が利用価値を見いだすのも、そこなのだ。

少女の感情によって個として存在することのかなった月犬――。

だが、その存在の大部分を占めるのは月光――月神気。

それは少年の支配下にあるモノだった。

「イダワントを呼んで」

前回、失敗した配下の名前を口に乗せ、少年はそっと目を伏せた。

「この間の彼の様子から見ると、懲りずに力押しで攻めるつもりかもしれないからね」

「道を指し示してやったところで、あれが素直に従いますか……」
懸念を表した男に、少年は「まあね」と応じる。
「あれの頭が固いのはわかってるけどね。特に女子供への侮りはすごいよね。同じ理由で、わたしに対しても、まだ不審感を拭えずにいる……わかっているけど、いいかげん、目を覚ましてもらわないと、ね。だから――」
一息置いて、つぶやかれた少年の言葉には、うすら寒くなるような、奇妙な迫力――否、圧力が、あった。
それでも、イダワントが目を覚まさない場合はどうなされるのですか――とは、男は尋ねなかった。
それは明白すぎる未来図として、男にも想像できるものだったからだ。
意に添えばよし、さもなくば――。
ここで、少年は男にとっては意外なことを口にした。
「実のところ、わたしにとっては、あの娘が生きようが死のうが、あまり意味はないんだよ。あれはあくまであちらがわに属する場合に限って、こちらに障害をもたらすモノ、なのだからね。けれど、このほとんど空になった器が彼女を惜しむ……。だから、なるべくなめらかに、彼女をこちらに取り込みたい……」

告白を聞かされた男が、呆れたように息をつく。
「その試金石として、かつての妹御を利用なさる……？」
「聞こえの悪い……」
否定も肯定もせず、彼は言い切った。
「わたしはただ、運を試したいだけだよ」
傲慢この上ない少年の言葉に、男は軽く瞑目し、うなずいた。
そんな男の反応に、満足したように少年はくすりと笑んだ。

17

久しぶりに街に立ち寄ることになったのは、ガネルオージェの提案にアラクセイトが賛意を示したためだった。

三人中、ソラミイノだけは渋ったのだが、携帯食料の補給を持ち出されては、強く反対することはできなかった。肉のたぐいなら自給自足で賄えるとはいえ、臭み消しの香草まではおいつかない——本来口の肥えている彼女には、臭みたっぷりの肉の煮染めやらスープといった代物は我慢しがたいものがあるらしい——さらには、必要に迫られての武器及び薬草のたぐいの買い出しという目的まであった。

最初の襲撃から二十日あまり——その間に四度も似たようなことが起こったとなれば、いいかげん、自衛の武器を各自——それぞれが得意とするものを——所持しておくにこしたことはない。

そういう意味において、得手とする武器を持っているのがガネルオージェひとりといういま

の事態はあまり歓迎できるものではなかった。
生兵法は大怪我の元――とは言うが、それも時と場合によりけりだ。
多少なりとも護身の心得があるのなら、最も得手とする武器の携帯は無駄とは言えない。
そういうわけで、ソラミイノとアラクセイトのふたりの武器を調達するためにも、一行は街に立ち寄る必要があったのだ。
ソラミイノには、細剣。
アラクセイトには……中剣を。
お世辞にも大柄とは言えず、しかも体格もがっしりしているとは言い難い少女に、なぜに中剣なのか――との問いは、親友であるソラミイノからでたものだが、ガネルオージェの目撃証言と、現実に示された物的証拠を前にしては、彼女に反論の余地はなかった。
証拠とはすなわち、月狼騒ぎの際、アラクセイトが生み出した、反撃のための武器――金剛石の鉈だった。
『アークに武器を持たせるだなんて……！』
とんでもないと言いかけたソラミイノに、ガネルオージェは他に選択権の――ほとんど――ない二者択一を迫ったのだ。
つまり、重量的には釣り合いのとれる中剣の使い方を彼女に教えるか、それとも使い慣れて

いるであろう鉈を振り回させつづけるか――と。

この、かなり切羽詰まった状況で、美意識云々を口にするほどソラミイノも浮世離れはしていなかったが……それでも、いかに護身のためとはいえ、さらに、他になにもないのならともかくとして――親友である少女が、無骨さではどっこいとはいうものの、中剣を揮うのと、鉈を振り回すのと……どちらがまだしもましだと感じるかと問われれば、答えは決まっているではないか。

そういった事情もあって、その街――晶池に立ち寄ることになった一行だったのだが、街に入るなり、俄然張り切りだしたのはアラクセイトだった。

「えっとぉ、まずは宿屋探しですよねえ？　でもって、その後が……うーん、難しいけど、生鮮食料――じゃなくてもいいから、とりあえずは香草とか保存食、手に入れられる市場ってことで……」

そこまでは、どうしたって、ミイノはいてくれないと困るわけだから――。

あまり、頭の中身を整理するのが得意ではない少女は、ぶつぶつとそうつぶやいた後、一行中、恐らく一番世間ずれしているであろう……否、一番世情に通じているであろう人物、ガネルオージェに問いかけた。

「剣を買うときは、やっぱり本人がいたほうがいいかな？」

「それが妥当だろうな。手に馴染むかどうかはけっこう大きいからな」
「そうか……」
うーん、と難しい顔でうなった少女は、「あ、でも」とつぶやいた。
「香草とか食料のほうは、ミイノがいなくても、何が必要か書いてもらえば、わたしでも大丈夫だろうし……ということで、宿と剣調達を優先しましょう」
ここで、これまで口を開かずに——否、開けずにいたソラミイノがぼそりと、皮肉げな声を洩らした。
「仲がよろしくて、けっこうなことね」
嫌味である。
「そんなこと……」
と言いかけたアラクセイトは、しかしここ数日というもの、確かにガネルオージェと結託状態にあるといえなくもないことを思い出し、口をつぐんだ。
それもこれも、原因はソラミイノの体調不良が原因なのだが、そんなことを言えば、勝ち気で、しかも最近傍目にも焦っているのが明白な親友は、かえって意地を張って無茶をするにきまっているのだ。
彼女の焦る気持ちはわからないではないけれど、そんなことはさせられない。

本人に自覚がないから尚更だ。
そのためにも、この街で神殿に立ち寄る必要があった――ただし、ソラミイノには内密に、だ。
（きっと、ただの白日夢じゃ、ない……）
確信できてしまうから、不安も大きくなる。
なにもかもが、あの一通の手紙から始まったような気がする。どこまでが吉事で、どこからが凶事なのか――それとも、そんな境界は初めからなかったのか……。
頭が痛くなる難問だった。
「そりゃあ、素振りの指導とかもしてもらってるし、何度も守ってもらったから感謝もしてるし……だから、確かに以前よりは親しくなったとは思うけど……」
と、そこまで言って、アラクセイトはあまり明るくはない顔で、ガネルオージェを振り返った。
「わたしたちって、仲良し？」
ガネルオージェもまた、難しい顔で応じた。
「犬と猿ぐらいには仲がいいかもな」
「だよねえ」

うんうんとうなずくアラクセイトは、本気の本気だったのだが、そんなやりとりさえ、ソラミイノの目には違って見えるらしい。

「そういうところが、仲がいいって言っているのよ」

声にはつんけんした響きと棘がたっぷり含まれていた。

（やっぱり、ミイノったら、ちょっと変……）

こんな風に、煮詰まるひとではないのだ、本来のソラミイノは。

わかっている以上、やることは決まっていた。

原因究明及び対策を練ることだ。

そのためにも、絶対に神殿には行かなければならない。ただし、ソラミイノには内緒で、且つ神殿にも彼女の事は秘めて――。

背筋がぞわぞわする。ここのところずっとだ。

よくない感じだ。

（これが、瘴気がらみなんだったら、もっとはっきりわかるはずなんだけど……）

わからないから、むずむずする。

こんな気持ちの悪い『むずむず』とは、さっさと縁を切りたかったが、同時にそのことを恐ろしくも感じている自分に気づいて、アラクセイトは眉宇を寄せた。

答えは、まだ、出ない。

ソラミイノが家を飛び出したのは、行方知れずとなった兄――ワレンアイノを捜すためだった。

アラクセイトはそんな親友を、ひとりにしてはいけないという直感でもって、半ば脅すようなやりかたで同行することになった。

いや、もしかしたら、それは直感というより、不安だったのかもしれない。

ともに旅するようになってすぐに、アラクセイトは親友の不思議な言動に気がついた。

捜すと言いながら、ソラミイノは迷うことなく、ただひとつの方向を目指し、進もうとしていたからだ。

（まるで、導かれるように……）

あるいは。

（引き寄せられるかのように――）

ソラミイノ本人に、その自覚はない。

だから、なおさら危険だと感じた。

はたして、ここのところ、ソラミイノは普通ではなくなってしまった。

自分やガネルオージェには聞こえない声が「聞こえる」といい、ふらりとどこかへ歩いて行こうとするようになった。それだけでもおかしいというのに、彼女はそうした状態にあった際のことを、なにひとつとして覚えてはいないのだ。

夢見心地の目をして歩いていた彼女が、岩に足をぶつけ、そのせいで右足の小指の爪が――のびかけだったのが原因のひとつとされたのだが――半ば剝がれてしまったのを、アラクセイトもガネルオージェもほとんど目の前で見ていた。

ところが、正気に戻ったソラミイノ自身は、そのことを覚えていなかったのだ！

『痛いと思ったら……いつの間に怪我なんかしたのかしら？』

心底不思議そうに首を傾げるソラミイノの姿を目にしたときに感じた……言いようのない不安と恐怖。

操られている――あるいは魅入られている？

それも、人外のモノに!?

そんなはずはない――とは、アラクセイトには言いきれなかった。けれど、そのことをソラミイノに告げることもできなかった。

なぜなら、ソラミイノを突き動かしている理由が理由だったからだ。彼女が必死になって捜している兄――ワレンアイノは、明らかに『月神』の加護を受けた徴を持っているのだから。ソラミイノ自身は、血の絆と月神の祝福による『導き』だと見なしているようだが、アラクセイトにはとてもそうは思えない。

あんな強烈な……強烈すぎる『呼びかけ』が、いいものだとは信じられない。

けれど――だからこそ、そのことは親友には言えない。

兄の身に起きた『奇跡』に関して、彼女は神経質なほど、過敏に反応するようになっているのだから！

だから、彼女には内密に神殿で聖石の子供石をもらわなければならない。彼女を――あの呼び声から守るために、それは絶対に必要なことだった。

不快な感覚が、全身を支配する。

足の怪我を理由に、早々に宿に戻るよう言われたソラミイノは、指でこめかみを押さえながらため息を洩らした。

ガネルオージェはともかくとして、アラクセイトにここのところ心配をかけている自覚はあった。覚えていないうちに生傷を大量生産してしまう現状は、指摘されるまでもなく異常だった。

記憶の一部が欠けているらしいことも気づいている。覚えていない時間のなかで、自分がかなり奇矯な行動に走っているらしいことにも――。

幸いと言うべきか、砂金と名付けた不思議な子犬――もどき、なのだが……便宜上、彼女は『月犬』と呼んでいる――を拾って以来、その手の異常の拡大は防がれている。どうしてなのかは不明だが、砂金のうなり声を耳にしたり、その体に触れたりすると、意識が現実に戻ってくるのだ。

おかげでいまでは、砂金はソラミイノの『お守り』扱いになっている。

実際、砂金をそばに置いておくと気持ちが落ち着くこともあって、ソラミイノ自身、半ば以上手放せない心境にはなってはいたが、それでも胸に湧き上がるイライラの全部が昇華されるわけではない。

不安と苛立ちが、常に彼女の精神を『揺らし』つづけていた。

先の見えない不安――そして、明らかになにかを隠しながら自分に接しつづける親友の態度……。彼女が自分に害を及ぼす可能性など考えたこともない。これからも、想像だとてできな

いに違いない。
アラクセイトは決して自分を裏切らない。なぜか、そう確信できてしまう自分がいる。
本当に、その理由などわからないのだけれど――。
だが――だからこそ、苛立たしさが募るのも事実だった。
八つ当たり――というのが一番順当な理由だったかもしれない。
（無理矢理ついてきたくせに……ならば、せめて邪魔しないだけの分別を発揮してもいいはずなのに……）
それなのにアラクセイトと来たら邪魔しまくりなのだ。
（おまけに……あんな男と結託して……!?）
実のところ、これが大きかった。
ソラミイノの心を占める屈託の原因のひとつは、まさに親友の最近の不審な挙動だったりしたのだ。
親友が、自分に内緒でなにかを謀っている――しかも、得体の知れぬ男と共謀して。
……その事実が、何より歯がゆい。
まるで、自分ひとりが爪弾きにされた――そんな感じだ。
もちろん、そんなものはただの八つ当たりだ――わかっている。尋常ならざる状態の友人を

思いやった結果、アラクセイトはガネルオージェと協力態勢をとることを選んだのだ。

恐らくは――。

問題は、そこまでのことがわかっていながら、一向におさまらないソラミイノ自身の感情だった。

（律せない……なぜ……!?　感情の制御なら、昔から得意としてきたはずなのに……!?）

そう思うそばから、剣呑な思いが噴き出てくる。

邪魔されているという――強固な事実に対する反発だ。

まるで、心をふたつに引き裂かれたかのような状況だった。

ゆらり……と、感情の波が揺らぐ。

揺らいで、思いそのものが溶け合って全然別のものに変化してしまう――そんな感じがした。

まさにそのときだった。

（あ、うそ……!?）

視界で、真っ白な光が爆発した！

意識を保つのも難しいなか、ソラミイノは必死に腕のなかの小さな命を抱きしめた。

『砂金……！』

白金の毛並みに、金粉をちらしたような不思議な子犬は、その瞬間月光の結晶に戻った。
少なくとも、傍目にはそう見えた。
そして――その次の刹那――。
彼女の姿もまた、宿屋から消え失せたのである――！

18

当面必要な保存食料及び乾燥香草のたぐいの買い出しを終え、宿に戻ったアラクセイトは黄橙色の双眸を瞠り、親友の名をつぶやいた。

「ミイノ!?」

いるはずの――しかも外出する予定もなかったはずの友人の姿が見えないことに、不審を覚えただけとは思えぬ狼狽の色がその顔には浮かんでいた。

「ミイノ……砂金ちゃん？」

もう一度、呼びかける――今度は『お守り』を兼任する子犬の名前とともに。

一番ではないものの、砂金はアラクセイトにもよく懐いている。眠っていても、呼ばれればすぐに姿を現すはずだというのに……なんの反応もない。

（出かけた……？）

一瞬そう思ったものの、そうではないことを確信する。

なぜなら、ソラミイノと砂金の気配が、あまりにも忽然とこの部屋から消え失せてしまっていたからである。

煙のように消え失せたとしか考えられない。

もちろん、ソラミイノが自らと砂金の気配を完全に殺した上で、出かけたという可能性がないわけではない。ただし、それはアラクセイトがそれを想定した準備をまったくしていなかった場合に限られる。

そして、ここ最近のソラミイノの様子に漠然とした不安を感じていたアラクセイトは、そのあたりのことに関しては、実はけっこうしっかりと対応していたりしたのだ。

ソラミイノの上着の裾に、綻びを繕う際、実はこっそり自分の子供石――ちなみに気配の強すぎる金剛石ではない、石墨――を縫いつけておいたのだ。しかも、違和感を覚えない程度に小粒のものを、何粒も。

邪魔だ、うっとうしい、足手まといだ、云々かんぬん以下省略。

さんざん言われていたアラクセイトの、それは最終兵器……もとい保険だった。知られることで親友の逆鱗を買うことさえ覚悟の上で、彼女は『置き去りにされないため』の対策に踏み切った。

なにがあろうと、どうしても、親友をひとりにしてはいけないと、彼女は本能で感じ取って

いたのである。

それが……役に立った。

（本当は、杞憂ですんでほしかったんだけど……）

少しだけ、親友のことを恨めしく思いながら、アラクセイトは自らの子供石の気配をたどるために目を閉じ――数瞬の後、呻きを洩らした。

まったく、皆目、感じとれなかったのだ！

しかも、気配はこの部屋でぷっつりと途絶えている。

まるでこの部屋から、忽然と姿を消したかのように！

（そんな馬鹿な……そんなことが……!?）

あり得ることだろうか!?

自分以外の誰かの考えを、是非とも聞き、参考にしたい――と思った彼女は、しかしすぐにその不毛さに絶望した。

それを頼める唯一の存在である青年――ガネルオージェは、抱いて生まれてきた聖石こそ破格の金剛石だったが、感応力やら感査力に関してはまったくの素人同然の役立たずであることを、遅まきながら思い出してしまったのだ。

自分もつい先日までは似たり寄ったりの役立たずだったことを思えば、とてもけなせる立場

ではなかったが、それでも苛立ちを覚えてしまう心ばかりは仕方ない。
（なんだって、こんなときに限って……）
力不足な自分。
戦力外の連れ。
消えてしまった、大切な親友――。
「どうしてっっ!?」
物事はままならない。
わかっているはずのこと――知っているはずのことだというのに……無性に腹立たしく感じられた。
（落ち着いて、落ち着いて、落ち着いて……）
考えるのだと彼女は自分に言い聞かせた。
忽然と消え失せたとしか思えない親友とその愛犬――その意味するところはなんであるのか……。
可能性の一に考えられることは、ソラミイノが自発的に姿を消したということ。
そもそも彼女はひとりで兄を捜すために家を出たのだ。自分もガネルオージェも、彼女にとってはおまけ……いや、自分に関しては足手まといだったはずだ。

ひとりになれたのを幸いに、彼女が自分たちふたりを出し抜く形で出立したという可能性は否定できない。気になるのはその消え方なのだが、理由を挙げられないこともない。彼女は足の生爪を剝がした状態にあり、到底完治しているとはいえなかった。だから、直接体に負担のかかる方法を避けた——と、考えることはできるのだ。

なにしろ、アラクセイトの経済観念の欠如ぶりに心底呆れると同時に危惧を抱いていたらしいソラミイノは、財布の中身の大部分と、貨幣価値を望めそうな物品いっさいを管理していたのだから。

そこで問題となるのが、この『物品』だったりする。

神殿関係者でなければ、到底そこまでの数を所有することはかなわない、その物品の名称は聖石の子供石と呼ばれている。

神々に——特に地神アスカニーリの加護を受け、本来大地が生み出す『石』を抱いて生まれてくる子供は『聖石の子供』と呼ばれる。

聖石とは、その子供がまさに抱いて生まれてきた石。

子供石とは、そんな子供たちが自らの才能を磨いた末、能力を発揮した際などに副産物として生じさせる、その人物が抱いてきた聖石と同種の石のことを指す。

この子供石は、大地から掘り出された同種の鉱物より貴重な石として珍重されている。

なぜかと言えば、それらの石には、大地から掘り出され、加工されたもの以上の神の加護が確認されていたからだ。

聖石の子供石――特にそのなかでも、貴石と呼ばれるそれは、病魔や瘴気から身を守る絶大な効果を誇る『お守り石』として有名である。

だが、聖石の子供石には、それ以外にも利用法がある。

天然の貴石以上の力を宿した子供石は、その内なる力と色彩によって振り分けられた属性によって、聖石を抱いて生まれてきた子供たちに限定して、特別な効果を揮う。

例えば火気を表す赤と緑――このどちらかの色彩を持つ子供石は、聖石の子供……もしくは使徒の手に渡った場合、持ち主に火気の加護を与える。

水気を表す黒や灰色の子供石ならば多大なる水に係わる神々の加護を、土気を表す黄、茶、黄橙色をたたえる子供石なら、地神アスカニーリのより強い加護を――といった風に。

そしてその加護の結果は、傍から見た場合、奇跡にしか見えない事も多い。

炎に包まれながら火傷ひとつ負わずに生還した者――。

洪水の濁流に呑み込まれたはずだというのに、けろりとして戻ってきた者。

魂ほどではなくとも、一夜にして百里は駆けて来たとしか思えぬ者。

奇跡――あるいは伝説として語り継がれる話の半分は、実のところ真実だった。

聖石の子供石はそれだけの力を秘めており、そして十全にその力を聖石の子供たちは引き出すことができるのだ。

そして――ソラミイノは紛れもない『聖石の子供』であり、彼女が管理していた『聖石の子供石』には、充分すぎるほどの力が宿っていたのだ！

（先日の騒ぎでお見舞いとしていただいた……青玉と紅玉の子供石が十粒近くずつあったはずで……）

しかも、それらは極上品だった。

青玉の青は、木気を表す。

木気は風に通じる。

つまり、力に溢れた子供石を、その使い方を知る聖石の子供が利用した場合、『忽然』と姿を消すことは可能なのだ。

ましてや、ソラミイノはいずれ神々に選ばれ『聖石の使徒』となること間違いなしと見なされている俊才――。

可能性は、決して低くはなかった。

けれど、アラクセイトは引っかかりを覚えたのだ。

（……違う。そうじゃない……）

それはただの思いこみにすぎなかったのかもしれない。
根拠もなにもなく、ただ強く、そう思っただけだったのだから。
けれど、思い出す。
ソラミイノの気配は、忽然と消えていた。
彼女ばかりか、彼女が最も溺愛していた子犬の気配までも巻きこんで！
冷静に、アラクセイトは考える。
ソラミイノとは——自分の知るソラミイノとは、はたしてそのような真似を平気でできる人
——もしくは性格だろうか——と。
答えはすぐに出た。
否——と。
だったら、残る可能性は何だろう!?
（攫われたんだ……！）
しかも、恐らくは尋常ではない方法で。
そう思った瞬間、なにもかもが、ぴたりとあわさった気がした。
連れ戻さなければ——。
反射的に、彼女はそう思った。

手がかりはふたつ――。

ひとつはソラミイノ自身の気配。

もうひとつはアラクセイトがこっそり隠して縫いこんだ石墨のそれだ。

そのふたつを頼りにしても、確実に見つけ出せるという保証はない。なにしろ、アラクセイトはそうした感査をしたことが……性格に言うなら、やり方は知っているものの、それを成功させたことがなかったからである。

しかも相手は未知の方策を用いてソラミイノを誘拐した、得体の知れない存在だ。一か八かの賭けに出るのは危険だった。

それでも――アラクセイトの決意は変わらなかった。

そうしなければ、親友を取り戻せないという確信がどこかにあったせいもある。

ただ、少なからず残念に思うことはあった。

そばに、あの、金剛石の子供である青年――ガネルオージェがいないことが、である。

ただし、それは心理的支えだとか、絆ゆえのものではない。

単純に、感査中の体を案じるがゆえのものだった。
だがいま、ここにガネルオージェはいない。
神殿に、『お守り石』を貰いに行ってもらっているのだ。家出娘及びその連れとして、手配されているかもしれないソラミイノとアラクセイトの代わりに。
（ガネルオージェさんが戻ってくるまで待ってるか、それとも……）
思案したのは一瞬だった。
その間に向こうに、感査の手がかりを消されてしまわない保証はないのだから！
そんなことにでもなったら、泣くに泣けない。それぐらいなら、多少の危険には目を瞑っても、急いで行動したほうがいい。
「一応、石墨で結界張っておくことにして……」
ひとつ、深呼吸――。
五芒結界の中心に座し、彼女はそっと目を閉じた。
求めるのは親友の気配ひとつ――。
知りたいのは、ただソラミイノの行方――それだけだった。

目を閉じる。

視覚的に外界からは遮断されるが、それは完全な隔絶ではない。

現に、閉じた瞼ごしに、淡く光を感じ取れる。

『目を閉じれば、なにも見えなくなるわけじゃない。ある意味、もっと見えやすくなるものもあるんだよ』

そう言ったのは、アラクセイトとソラミイノの師匠と呼ぶべき女性――黒珊瑚の使徒カートーニだった。

そして、彼女はこうも言った。

『内側から、《見る》んだよ。そうだね、一番やりやすいのは額の下のほう……眉間あたりかね？　体の内側から眉間を見つめるような感じで意識を集中させるんだ……』

そうすると、そのあたりがほんわりと明るくはならないかい？

見えるはずだが――とでも言いたげな師匠の言葉に、アラクセイトがうなずけた試しはなかった。

怠ける気など皆目なく、真面目に精進していたつもりだったのだが、師匠たちとともにあったころ、彼女はこんな初歩的なところで行き詰まっていたのだ。

それが……なんと皮肉なことなのか。
切羽つまったこの状況で、あっさりとできてしまうとは。
（あ、なんだかほんわりと……明るく……見える……。わたしって、緊張感ないから、修行でうまくやれなかったのかな……）
そんなことを思ったアラクセイトは、しかしすぐに気を引き締めた。
捜すべき相手は、まだ見つかっていないのだから。
（ソラミイノ、ソラミイノ、ソラミイノ……！）
求めるのは親友の気配ひとつ――。
知りたいのはソラミイノの行方――ただひとつ――！
アラクセイトは明るくなったそこに、ありったけの親友のことを想い、刻んだ。
彼女の行方を知るための『標』とするために。
綺麗な白金の髪――。
ちょっときつい、けれど綺麗な、整った顔立ち――。
深く澄んだ、それでいて厳しい視線をたたえる深い綺麗な緑の双眸――。
大好きな、親友……。
（ソラミイノ――）

脳裏にその姿が浮かび上がってくる。
（ミイノ……あなた、どこにいるの……!?）
それは——心からの呼びかけ。
心底からの、問いかけだった。
（ミイノ——っ！）
応える声は、なかった。
けれど反応がなかったわけでもない。
眉間に……光そのものとしか思えない、一筋の『道』が、視えた。
辿らなければ——アラクセイトは直感した。
（これが、ソラミイノに至る道——！）
疑いを差し挟む余地さえない真実だと、アラクセイトは信じた。
（どこ……あなたは、どこにいる……!?）
肉眼ではない目で、彼女は必死に親友の姿を捜す。
必死に——懸命に。
これまでの人生でやったこともないほどに——。
捜して、求めて——。

その果てにアラクセイトは悲鳴を上げた。
（なぜ!?　どうして!?）
道が――ふたつに、分かれていた。
ぱっきりと。
罠だろうか――と、アラクセイトは思った。
あり得そうなことだった。
けれど、どちらかを選ばずには先には進めないという点で、それは人生とちっとも違わないもの――選択だった。
選ばなければ、ならなかった。
ふたつに、ひとつ。
どちらかが当たりで、残ったほうは外れなのだ。
（ミイノ……ミイノ、ミイノ……！）
必死に親友の名を呼んだ。
（どっちが、正しい……!?）
尋ねても、答えは出ない。
（どちらが正しいのかなんて……わからない……のなら……）

後はもう、直感に頼るしか、ない。
そうして、彼女は選んだのだ。
ふたつに分かれた道のひとつを。
それはある意味正しい選択であり、またある意味においては誤ったそれだった。
そして、その果てにアラクセイトが目にしたもの——それは。
『ミイノっ!?』
衝撃のあまり、彼女は思わず悲鳴をあげていた——！

19

そこは、少年の支配する力に溢れた場所だった。
硬い岩盤の覆う天井部分には、いっさいの割れ目も穴もなく、ほかの方向から射しこんでくる光もない。
本来ならば、漆黒の闇に包まれていて当然のはずのその場所は、しかし、ほのかな銀色の光に包まれていた。
鋭い感覚に恵まれ、且つ、それなりの知識を持つ者であれば、その光が月光に酷似しており、またその場を満たす力が月神気だと見抜いたかもしれない。
だが、そこに少年以外に人間はいなかった。少なくとも、呼吸する存在は、彼以外、誰ひとりとしてなかったのだ。
少年は、美しい銀の髪をさらりとかきあげながらつぶやいた。
ため息まじりに――。

「本当に、この世はままならない……」

声に宿る憂いの響きは、聞く者がいれば、切なさにその胸を痛めたに違いないほどに強烈だった。

少年は、銀の双眸を静かに横たわる『人形』に向けていた。

白金の髪と緑の瞳を持つ、勝ち気そうな美少女――ソラミイノという名で呼ばれる存在だった。

ただし、いまは、その瞼は閉ざされたままだ。

それが、少年には面白くない。

必要あっての処置だとはわかっているが、予定外の事態であることに変わりはない。そのことが彼の機嫌を損ねていた。

忌々しい、というのが、一番近い感覚だろうか。

少年は無表情に、意識のない横たわる少女の喉に手をのばした。

片手だった。

当然、その指の長さでは、括ることはできない。だが、喉元にのばした右手にある程度の力を加えた途端、指という指が不自然に痙攣しはじめたのだ。

少年が、舌打ちした。



「まったく……」
厄介なことだ――と、つぶやきかけた少年は、招かざる客の気配に気づいた。
実体ではない、意識体……いや、その感覚をのばした触手のようなモノだった。
実害はない。それでも不愉快だった。ここは彼にとって牙城にも等しい場所なのだから！
「目障りな羽虫だね」
眉宇をひそめつつ、少年は傲慢に命じた――自らの視線の先に存在する魂へ。
「お帰り……そして、お休み」
永遠に――。
声にならない甲高い悲鳴が、その空間を震わせたのは次の瞬間のことだった。

ガネルオージェが晶池の神殿を後にしたのは、アラクセイトたちと別れて、約一刻半後のことだった。
神殿に手配されているかもしれぬふたりの代わりに、顔を出し、且つ『頼み事』ができるのが、彼以外にはいなかったせいである。

もっとも、神殿を訪ねる以前と以後の彼の懐の中身の差異を、アラクセイトが知ったなら、「行かせる必要なかったのに！」と、歯がみしたかもしれない。

そう、彼は結局、彼女の期待する『お守り石』を入手してはいなかった。

それどころか、実のところ、そんなつもりも皆無だった。

なぜなら、彼は知っていたのである――アラクセイトの望む、神気すら阻む力をたたえた聖石の子供石など、この世界のどこを探しても見つかるはずがないということを。

また、そんなことを口に出せば、どれほどの危険を呼び寄せるかも知っていた。

神気を阻む――など、本来であれば、背信者の言葉にしか聞こえない。

この世界――バルヴァローズを創造した神々を否定し、その力を排除する不心得者と見なされてもおかしくないことなのだ。

しかも、一般には知られていない裏事情もある。

バルヴァローズの大地には、かつて月神であったころの喪月神――サイサロールの力と気配を色濃く残している場所が九つ、存在していることだ。

その場所は、地神アスカニーリ女神によって、用心深く人間の目から隠されている。その土地があることは伝えられているものの、それがどこにあるのかを知る者はいないのだ。

当然、アスカニーリ神殿の者はその場所を知りたがっている――。喉から手が出るほどに、

そこに関する情報を欲しているのだ。

あの白金の髪の少女の家族が、奇跡的な生還を果たしたその兄の身に起こった不思議にこだわったのも、それが関係しているのに違いない。ふたりの少女たちが、そのあたりの事情に通じていないのは明白だった。そうでなければ……もし、自分たちがどれほど危険なことに首をつっこんでいるかわかっていれば、もう少しは慎重に動いているはずなのだから。

かろうじて助かっていることがあるとすれば、それはふたりが『家出』の件で神殿から手配されているかもしれない——と、思ってくれていることだ。

そうでもなければ、あのふたりは、自分たちが、神殿にとってどれほど危険——あるいは貴重——な存在かも知らず、駆けこんでいたかもしれない。

月神気と縁があるということの持つ意味を、ふたりは知らないのだから。

そしてまた、別の意味でも彼女たちは世間知らずだった。

なぜ、ガネルオージェがアラクセイトの頼みをきいて——実際の目的はまったく違ったわけだが——神殿を訪れる気になったのか。

彼女たちは、わかっていない。

旅を続ける以上——否、生きていく以上、どうしても金は必要になるということを。

いや、まったくわかっていないわけではないのだろうが、現実的な部分で、しっかりと把握

できているとは言い難い。
全面的に面倒を見てやるつもりはないものの、約束を交わした以上、その期限内のことは気をつけてやるべきだろう、とガネルオージェは思っている。
今回の神殿詣では、早い話、そのための資金調達が目的だったのだ。
ついでに、怪しまれない程度の範囲で、情報も収集するつもりだった。
おかげで、いくらかの路銀と情報を入手することができた。
問題は、これからだった。
（さて、どうしたものかな……）
声なくつぶやきながら、ガネルオージェは思案した。
やはりあのふたりには、しかるべき自覚を持ってもらうのが先決だろうか。
ただし、そうなると、あの白金の髪の少女には、実の兄の身に起こった奇跡の意味をも認識してもらわなければならなくなる。
かなり神経質になっている少女のことだ。素直に耳を傾けてくれるとは限らない。
（どうしたら……）
いいのだろうかと、首を傾げた青年の耳に、凄まじい爆音が飛びこんできたのは次の瞬間のことだった。

「なにをやってるんだ、まったく」

というのが、騒ぎになった宿に戻ったガネルオージェの本音だった。

以前のこともあり、彼はこの火事がアラクセイトによるものだと確信していた。またぞろ力を暴走させたのだと思ったのだ。

（騒ぎは厳禁だと、自分で言っていたくせに……）

さぞかしもうひとりの少女は激怒しているに違いない、と思った。

それはさておき、ふたりはどこだろう――と、周囲に目をやった彼は、白金と紫紺という、かなり目立つ組み合わせの頭が見あたらないことに不審を抱いた。

野次馬も集まり、宿の周囲はひとで溢れている。大柄とはいえない少女ふたりが、そのなかに埋没していてもおかしくはないのだが、奇妙な胸騒ぎを覚えた。

（まさか……まだ、なかにいるんじゃないだろうな……？）

こういうとき、感覚が鋭いとは言い難いガネルオージェは歯がゆくなる。

子供石の力を用いても、宿の内部にあのふたりが残っているのかどうか、知ることができな

いからだ。師匠である青玉と紅玉の使徒ふたりも、その手のことが苦手だったため、よく最寄りの神殿に助っ人を頼んでいたものだ。

とはいえ、今回それは望めない。ガネルオージェは聖石の使徒ではない。正式な要請はとてもできない話なのだから。

（おまけに、あいつらは手配中だし……）

そう、彼女たちの懸念通り、ストリーヴ家は『家出娘』とその連れの特徴を、各地の神殿に送っており、それはこの晶池も例外ではなかったのだ。

となれば、ガネルオージェに許された選択肢はふたつしかない。

自ら炎のなかに飛びこんだ上で、ふたりの安否を確認するか、無事を信じて彼女らを捜すか——だ。

後者を選びたいのはやまやまだったが、悪い予感ほどよく当たるという言葉もある。

あのふたりに限って、おとなしく炎に包まれて命を落とすようなことはないとは思うが……非っ常に、よろしくない予感がした。うなじのあたりがちくちくするのだ。

（まったく、振り回してくれるもんだ）

忌々しい気分で舌打ちを洩らしつつ、彼は懐から『子供石』の入った袋を取り出した。

神殿で、自分の石の大部分を処分してきたのはある意味幸いだった。この火事がアラクセイ

トの暴走によるものなら、彼の子供石――すなわち金剛石は、まさに火に油を注ぐ効果しか発揮しないはずだからだ。

（水気……なにか、水気をたたえた石は……）

袋から手のひらに取り出した、色とりどりの子供石――そのなかから、彼は黒瑪瑙三粒を取り上げた。

黒は水気を表す色――そして、水気は火気に克つ。

ただし、火もとが火神の娘である可能性が高い状況では、どれだけ当てにできるかは、いささか不安だったが……。

（仕方ない）

と、自身に言い聞かせながら、ガネルオージェは黒瑪瑙を摑み、行動を起こした。

燃えさかる建物に向かって、走り出したのだ！

「やめろ！　なにをする気だ!?」

「死ぬ気か!?　おい、みんな、こいつを止めろ！」

消火活動に繰り出されていた男たちが、必死で止めようとして腕をのばしてくるのを、するりするりとかわしながら、彼は宿に飛びこんだ。

炎の勢いが、強い。

（熱い）

黒瑪瑙を握っていなければ、あっという間に煙と熱で目や喉をやられてしまったに違いなかった。

まったく、貧乏くじもいいところだと、そこまで考えて、ガネルオージェは今更ながらに、なぜ自分はこんなことをしているのかと思った。

（あいつらが逃げ遅れたって証拠があるわけでなし）

いや、百歩譲って、たとえそうだとしても、だ。

ここまでしてやる必要が、はたしてあるのだろうか――。

（ない）

理性は簡単に答えを出した。

なのに、不可解この上ないことに、そうと感じても、ガネルオージェは踵を返して引き返そうとは、どうしても思えなかった。

（馬鹿な真似をしている……）

そう思うのに、足は前に進みつづけるのだ。

そして、自分たちが借りた部屋の片方――少女たちが泊まることになっていたそこの床に、紫紺の髪を床に広げるようにして、少女のひとりが横たわっているのを目にした瞬間、心臓が

どくん、と大きく脈打ったような錯覚を覚えた。
それが不可解で、思わず彼は首をかしげた。
（十中八九、こいつの暴走が原因だろうと思ってたが……やっぱりか）
予想通りの結果だった——意表を衝かれるような材料はない。
というのに、少女の姿を目にした瞬間、全身を襲った衝撃はなんだったのか。
湧いて出た疑問を、しかしガネルオージェはとりあえず棚に上げておくことにした。
すぐに答えが出るかどうかわからない疑問に、かかずらわっていられるほど、いまは呑気な状況ではなかった。
「おい」
とりあえず、倒れたままの少女に近づき、その肩を揺さぶった。
「おい、どうした」
しかし、少女の反応はない。
まさか、煙を吸いこみすぎたのかと思い、そばにひざまずいたガネルオージェは、少女の全身に走る裂傷に気づいた。
火傷ではあり得ない。
傷口から溢れた血が、固まり、皮膚にこびりついている。

ただごとではなかった。
「おい、おい、しっかりしろ！　いったい、なにがあったんだ!?」
問いかける彼の声に、アラクセイトがようやく反応した。
「ミイノが……ミイノが攫われて……！　捜したんだけど……っっっ！」
少女の黄橙色の瞳に、瞬く間に涙が溢れた。
「わかった」
と、ガネルオージェは答えた。
他に応じようがなかったとも言える。
とりあえず、ガネルオージェは、そのとき自分にできることを選んだのだ。
「話はあとでちゃんと聞く。聞くから……今は、とりあえず、休め」
満身創痍状態のアラクセイトは、それでもなにか言いたげだったのだが、結局ガネルオージェの怒鳴り声に押し切られる形となった。
「いいからっっ！　いまは黙ってろ！」

20

熱かった。

全身が燃えるように熱かった。

（まるで炎に炙られているかのよう……）

と思い、しかしアラクセイトはすぐにそうではないことに気づいた。

頬を撫でるように吹く風は、熱風などではない。

ひんやりしていて、けれど冷たすぎることもなく……。

（気持ちいい……）

と、彼女は思った。

そんな彼女の耳に届いたのは、ぱちぱちと火の爆ぜる音と、鳥の声――。

夜行性で知られる猛禽類の独特なその声に、アラクセイトは不審を覚えた。

（夜……？　いまは夜なの……？　だって、夜ならもっと寒いはずなのに――）

と、そこまで考えたとき、彼女は自分たちが、南に向けて移動していたことを思い出した。
（そうだ……無理矢理ミイノにくっついて……）
突然行方の知れなくなった親友の兄を捜すために、彼女の家出につきあったのだ。
（それで……それからどうなったのだっけ……？）
頭のなかに靄がかかったかのように、うまく思い出すことができない。
（ええっと、途中でガネルオージェさんが加わって……それで、そう、晶池までやって来たんだ……そう、確かに）
街に立ち寄る必要を覚えた理由は三つ——。
携帯に便利な保存食及び乾燥香草の入手。
いま現在神殿の保護を望めない——神殿関係で大きな力を持つ一族の一員でありながら、ソラミイノは家出中なのだ——事情を考慮した結果の自衛手段の確保のための武器の調達。
そしてなにより必要だったのは、得体の知れない『何者か』からの干渉を断ち切るだけの力を持つ『お守り石』だった。
（保存食は……手に入った……）
武器の方も、使い勝手を考慮した結果、一日、加工のための時間をおくことで、問題は解決したはず……なのだけれど。

（ああ、そうだ。だから、今夜はわたしたち、晶池の宿で休めるはずだったのに――）

なのに、どうして、こんなことになってしまったのか。

吹く風の気配、聞こえるフクロウの声――。

間違いなく戸外だとわかる。

（でもわたしたちは、晶池の宿で休んでいるはずなのに……!?）

どうして、ここは晶池でないのか。

なぜ、野宿しているのか。

なにより――一番親しく思っている親友の気配が、なぜにどうして感じ取れないというのか……。

（なぜ……？）

つぶやこうとした瞬間、全身に痛みが走った。

「……つっ！」

わけがわからない。

（どうして、こんなに痛いの？　いったい、なにが……）

起こったというのか。

混乱しかけるアラクセイトの意識を、現実に引き戻してくれたのは、淡々とした青年の声だ

った。
「気がついたか」
ガネルオージェだった。
（ガネルオージェさん……）
思わずほっと息をつく。
ここにいるのが、自分ひとりではないということ――しかも、それが見知らぬ他人ではないことに、アラクセイトは安堵を覚えていた。
無条件に信頼できる相手とは言い切れないのがナニだったが、ひとりきりに比べれば、よほど心強いというものだ。
と、そう考えたとき、彼女はふと違和感を覚えた。
（なぜ、ひとりきりだなんて……）
自分のそばには、親友が……ソラミイノがいるはずなのに――。
正確には、自分が彼女から離れるはずがないというのに――だ。
「ミ、ミイノは……っ!?」
起き上がり、その目で探そうとしたアラクセイトは、しかし全身の訴える痛みのあまりの大きさに、半ばでその努力を放棄せざるを得なかった。

本当に、どこもかしこも痛かった。

（なんなの、これは!?）

痛すぎて満足に声も出せない。

そんな彼女に、ガネルオージェはさらなる衝撃を与えた。

「いない。少なくとも、おれが駆けつけたときには、傷だらけのお前以外、宿の部屋にはいなかった」

あまりといえばあまりの言葉に、アラクセイトは黄橙色の双眸を、思い切り大きく瞠った。

なんで……と尋ねかけた彼女は、脳裏になにかがちらつくのに気づいた。

（なにか……忘れてる……？）

その疑問が正しいことを、ガネルオージェの次の台詞が証明した。

「おれがお前を見つけたとき、お前はあいつが攫われたと言っていた。思い出せるか？」

（攫われた……ミイノが!?）

思い出すもなにもない。

そんなことは信じられない。

嘘でしょう――と、つぶやきかけた彼女は、しかしそうはできなかった。

なぜなら、このときを待っていたとばかりに、記憶が迫り上がるように甦ってきたからだ。

（……そうだ。そうだった……思い出した）

夢であれば、どれほどよかったろう。

あのときの直感が、ただの勘違いであったなら、どれほど嬉しかったろう。

けれど、あれはまぎれもなく現実なのだ。でなければ、この全身を襲う痛みは説明できない……親友の気配をたどって感査したその先で、自分はこの傷を負ったのだから！

銀色の光と力に溢れたあの場所に、親友である少女は横たわっていた。

その傍らに、あの恐ろしいひとはいた。

銀色の髪と瞳を持つ、禍々しい月光の化身としか呼びようのないあのひとが。

そして、そのひとは、魂だけの存在として、ソラミイノを捜していた自分を見つめた。

まるで、うるさくつきまとう羽虫でも見るかのように――。

『お帰り……そしてお休み。永遠に』

その声を耳にした瞬間、アラクセイトの意識はあの場所から弾き飛ばされたのだ。

殺されるところだったのだと、彼女は直感した。

いや、相手は確実に自分を殺すつもりだったのだ。

ガネルオージェが駆けつけてくれなければ、きっと今頃、自分の命はなかったに違いないのだから。

と、そこでもうひとつ疑問を覚えた。

（そういえば、ガネルオージェさんって、確か、感査とかって苦手……っていうか、できないって言ってたはずなんだよね。おまけにあのときは、ガネルオージェさんには神殿に行ってもらってたわけで……。まさか虫の知らせを受けたってわけでもないだろうし……ああ、やだやだ、不吉すぎるし。でも、そういうんじゃなかったら……）

正直なところ、声を出すのは億劫だったが——なにしろ、普段意識せずに使っている筋肉の所在を否応なく思い知らされている状況である——だが、それ以上に、現状の把握は必要に思われた。

「と、ところで、ガネルオージェさんは、なんで……？　もしかして、なにか騒ぎでも起こったんで……」

しょうか——？

そんなことでなかったらいいな——という、アラクセイトの希望は裏切られた。

「騒ぎもなにも。突然爆発が起こったって話で、しかも聞けば、そいつはおれたちが取ったばかりの宿ときてる。てっきりまたぞろお前が能力暴走させたんだろうと思ったんだが、野次馬にも避難客にもお前らの姿が見えない。こいつはちょっとおかしいってことで、火に包まれた宿に飛びこんで捜してみれば、お前は全身傷だらけでぐったりしてるし、もうひとりの姿はな

い……し」

あのときは、どうしようかと思ったぞ。

そう告げられた瞬間、アラクセイトはがっくりと肩を落とした。

「もしかして……。騒ぎが起こった元凶はわたしたちだとか……思われてたり、するんでしょうか……？」

本人、慎ましやかーに尋ねたつもりのその問いに、ガネルオージェはあっさりとうなずいたのである。

「間違いなく、そう思われているだろうな」

どこ吹く風、といったガネルオージェの態度に怒りを爆発させた少女は叫んだ。

「そんな……じゃあ、わたしたち、これからどうすればいいんですか――っ!?」

ガネルオージェは無情にも、こう答えた。

「さてな」

思わず頭を抱えこんでしまったアラクセイトだった――。

しばらくの間、焦ったり落ちこんだりと忙しかったアラクセイトだが、落ち着いてみれば、やることなど決まっていた。

「ミイノを、助けたいの」

きっぱりと言い切った彼女に、ガネルオージェは、

「勝算はあるのか」

と尋ねてきた。

「勝算……？」

思わず首をかしげた彼女に、青年は淡々とした口調で、問題点を提示した。

「まずは、居場所だ。わかるのか？」

これにはすぐに彼女もうなずいた。

「感査したときの気配が残ってるから、方向ならわかると思う。それに、子供石持ってるのはミイノだから、そっちからも捜せると思う」

それについては自信があった。

聖石の子供石と、それを生み出した人間の間には、引力にも似た絆が存在する。『お守り石』や『薬湯』に加工されたものは別だが、そうでなければ、生み出した本人なら、わりとたやすく行方を追うことができるのだ。

ソラミイノが管理していた子供石のなかには、アラクセイトの生み出した石墨や金剛石も含まれている。たどれないはずはない。

もっとも、ガネルオージェには何度も力を暴走させたところを見られていたから、アラクセイトは内心ひやりとしないでもなかった。いまの状況で揶揄されたり皮肉られるのは、けっこう……かなり堪えそうな気がしたからだ。

そんな彼女の心中を知ってか知らずか、だがありがたいことに、青年はそうした言葉を口にしたりはしなかった。

ただ……内心ほっとしたアラクセイトに投げかけられた次の問いかけは、あまり彼女の心に優しいものではなかった。

「まあ、その方面はおれの管轄外だから、任せるしかないんだが……見つけたはいいが、また弾かれて大怪我なんてことにはならないんだろうな？」

これに対しては——自信たっぷりにうなずくことはできなかった。

「え、ええーと……見つからないように、気をつける……」

つい目が泳いでしまうアラクセイトだった。

「気をつけた程度で、どうにかなる相手なのか？」

青年の口調は、決して厭味なものではなかったが、だからこそ、胸にくるものがあった。

なにしろ、その相手に弾き飛ばされたおかげで、現在アラクセイトは全身包帯だらけの状態なのだ。鎮痛と止血の効果のある薬草を、ガネルオージェから貰って傷口に貼ったおかげで、かなり楽にはなっているが、感査のたびにこの怪我では、遠からず体のほうがまいってしまうに違いない。

それがわかるだけに、アラクセイトは一瞬詰まってしまった。

嘘が苦手な上に、決して自信たっぷりにはなれない彼女は、当然なことに、はったりも得意ではなかった。

けれど、このままソラミイノを放っておくことはできなかった。

なぜなら、アラクセイトは確信していた。

アレは、よくない……ひどく、よくないものだということを。

あの銀色の光と力は、『瘴気』でこそなかったが、それと同じほど——いや、場合に因っては瘴気以上に危険なモノだった。

（あんなところに長いことといたら、きっと、ミイノによくないことが起きる……）

それだけは、わかってしまうから、彼女は必死に言い募った。

「本当に、できる限り、見つからないように注意するから……」

「だから、それが通用する相手なのかと聞いてるんだろうが。できないかもしれない……い



や、できない可能性が高いと思ってるから、お前もそんな顔してるんだろう?」

どこまでもつけつけと遠慮のない言葉に、アラクセイトは唇を噛みしめた。

泣きたくなる。でも、泣いたところで事態が変わらないこともわかっているから、必死に我慢した。

そんな彼女の様子に、あきれたようにガネルオージェが息をついた。

「そんな、泣きそうな顔するんじゃない。お前たちが家出中なのは知ってるが、ここまで大事になったら、そうも言ってられないだろうって、おれが言いたいのはそういうことだ」

「神殿に事情を話して助けてもらうってこと?」

そんなことになったら、ソラミイノはきっと、烈火のごとく怒るだろう。

無事、助けられたとしても、すぐに一族に保護され、きっと厳重な見張りをつけられてしまうだろうから。

二度と屋敷から出してもらえなくなるかもしれない。現にその確率が高いから、なにがあろうと、目的達成までは、捕まるわけにはいかないと、あの親友は洩らしていたのだから。

けれど、いまが危急の際であることも事実だ。

家出のやり直しは——恐ろしく難しくなることは確実だが——できないとは限らない。

だが、ソラミイノになにかあったとしたら、再度の挑戦もなにもできなくなるのだ。

「ええっと……じゃあ、晶池にいったん戻って……？」

しかし、意外にもガネルオージェは、彼女のこの言葉にかぶりをふった。

「いいや、神殿はまずい。お前……お前たちは知らなかったようだが、神殿は月神に縁深い人間には、やたら厳しいんだ。理由は……想像がつくだろう？」

「喪月神も……かつては月神だったから……？　でも、喪月神の気配と月神気は全然違うものなのに……!?」

喪月神の気配は――この世で最も強烈な毒気……瘴気のなかの瘴気だ。

月神気は、違う。

まったく違うものだ。

なのに、なぜ、神殿はそこまで警戒するというのか。

双眸に疑問符をたたえたアラクセイトに、ガネルオージェは「おれもそこまで詳しいわけじゃないが」と前置きしてから説明してくれた。

「バルヴァローズの創世神話には、世間一般に知られていないくだりがいくつかある。そのことは知ってるな？」

こくり、とアラクセイトはうなずいた。

民に無用の不安を与えかねない一部の内容は、神殿によって、あえて秘されているのだ。

海神アイルトーリと、後に喪月神となったシイムタールとの交流に関する部分がこれに該当する。

ふたりの兄妹神の間に、バルヴァローズを支え得る神は誕生しなかった。

それでも神殿は、そのくだりを秘した。後の喪月神となったシイムタールと通じた女神に——正確に言えば、その女神の加護を受けた人間に、民が不安や不信感を抱き、あげくに迫害に走るようなことにならないように、だ。

海神アイルトーリは水神カンラタールの母神でもある。

かの女神への不信を覚えては、ひとは生きつづけることさえ困難を覚えるだろう。

「それは……月神が……サラムトーリ女神が、他のふたりと三つ子として誕生なさったから……？　だから、月神の加護を得る者や、少しでも縁を持つ者は油断がならないと——？」

複雑な思いでそう尋ねたアラクセイトに、ガネルオージェは「いいや」とかぶりをふった。

「そんな単純な問題じゃない。なまじ分身にも等しい兄神たちの変質に、最も心を痛めたのはサラムトーリ女神だと言われている。そのせいか、サラムトーリは創世神中、最も厳しい律を自らに課してるって話だ。神殿が、是が非でも隠そうとしているのは、サラムトーリ女神についての話じゃない。サイサロールは堕する以前、バルヴァローズの大地をこの上なく愛し、妹であるアスカニーリに、いくつかの隠れ家を融通して貰ったという話だ。だが、そこがどこだ

か、ひとには明かされていない、そして、いいか、これが肝心なことだが、その場所はいまでも存在している可能性があるんだ」

思わず、口元を手で覆ってしまったアラクセイトだった。

喪月神の片割れであるサイサロールの、かつて月神であったころの気配と力が、あるいはいまも残っているかも知れない場所が……このバルヴァローズに何カ所もある!?

月神気と瘴気は、全然違うものだ。

けれどもし、それに触れ、扱うのが、サイサロールの意識を持つ者であったなら!?

思い出す。

自分を羽虫かなにかのように、見つめて弾いたあの少年の眼差し。

ソラミイノを抱きしめるように、同時に捕らえて放さないかのように、しっかりと包みこんでいた、あの恐ろしい銀色の光――。

（あれは……じゃあ、まさか……!?）

絶望に胸が塞がれそうになる。

「そんな……！」

思わず叫びそうになったアラクセイトの頬を、ガネルオージェが軽くはたいたのはそのときだった。

「落ち着けって。手がないわけじゃないんだから！　正直、おれやお前だけじゃ手に余る事態だが、お前らの師匠たちなら、なんとかできるかもしれないんだぞっっ！」

衝撃と痛みで、一瞬我に返ったアラクセイトは、しかしすぐに、思い出した事実ゆえにぶわっと泣きだした。

「駄目なんです――っ！　ミイノの家、出てからしばらくして教えてもらったんですけど、ミイノってば、わたしなんかよりよっぽど周到で、カーラさまたちからいただいた珊瑚の子供石、お家に置いて来たり、わたしが持ってた分はさっさと処分しちゃったんです！　おふたりの子供石持ってる限り、絶対、すぐに捕まっちゃうからって……！」

これには、ガネルオージェも苦い顔になった。

「なんてこった……となると、うちの師匠たちに頼むしかないわけか？　だが、あのふたりはふたりとも、おれと同じくらいには鈍いし……第一、おれは破門されたばかりだぞ？」

思い悩む風のガネルオージェに、アラクセイトは自覚もないまま、爆弾を投げつけた。

「なんにしたって、無理です！」

その言いざまが気に入らなかったのか、ガネルオージェが口を尖らせた。

「お前なっ！　やりもしないうちから無理だなんて決めつける程度の根性しか持ち合わせがないんなら、最初っから言い出したりするんじゃ……！」

「違います！」

アラクセイトの声は、すでにほとんど悲鳴になっていた。

「なにがどう違うんだ！」

ガネルオージェのそれは、ほとんど罵声となっていた。

「だって、ナウルニールさまの子供石もっ！　トリノアークさまの子供石もっ！　全部、全部、ミイノに持ってもらってたんですものっ！」

長く、重い沈黙がその場を支配した。

「……一粒残らず、か？」

こくんとうなずいた彼女の目の前で、青年がそれはそれは深いため息を洩らしたことは言うまでもない。

21

絶望的とも思える状況に置かれ、一時期大泣きに泣いた少女は、しかし立ち直るのも早かった。

珊瑚コンビと鋼玉コンビという、実に頼りになる――性格はよろしくないが――師匠たちの助力を得られそうにないことが判明したときは、さすがのガネルオージェも目の前が暗くなるような錯覚を覚えたものだが、紫紺の髪の少女はへこたれなかった。

その全身はいまだに包帯に包まれており、また彼女の親友を攫ったとおぼしき『誘拐犯』の強大さを忘れたわけでもなかろうに、少女――アラクセイトはあきらめようとはしないのだ。

不屈の意志と呼ぶべきか、それともあるいは……。

「お前、もしかして、開き直ってないか？」

ついそう尋ねたガネルオージェに、彼女はけろんとした顔でうなずいた。

「開き直ってますよ？」

それがどうかしたのかとでも言いたげな顔で問い返され、彼は咄嗟に言葉が出なかった。

「だって、神殿に駆けこむわけにも、カーラさまたちのお力を借りることもできないってことなら、わたしたちでなんとかするしかないわけですもん。泣くだけ泣いたら、気分も少し晴れたし……」

空元気には違いないのだろうが、それだけではない落ち着きを感じ取り、ガネルオージェは少々意外に思った。

出会ったころに受けた印象が、いまだに根強く残っているせいかもしれない。

なにしろ、場の空気は読めない、すぐにきゃあきゃあ騒ぎたてる――いや、初対面も同然の相手に、いきなり誘拐されたのでは、騒がないほうがおかしいのだが――おまけに訳知り顔で説教じみたことを口にする……などなど、大変神経に障る相手だと思っていたのだ。

さすがにしばらく旅をするようになってからは、決して苦労知らずの箱入り娘ではないことや、ぽややんに見えても頭が悪いわけではないことには気づいたが……正直、ここまで度胸が据わっているとは思わなかった。

そんなガネルオージェの心中を知ってか知らずか、いまもアラクセイトは真剣な面持ちで、石墨を手に、雑記帳と睨み合っている。

「せっかく買ったのに、香草と保存食が灰になったのはやっぱり痛いなあ……。武器のほうも

前払いしたのに引き取りに行けなかったし。ああ、大損だわ。おまけに財布はミイノが持ってるし……方角はわかってても、どれくらい距離があるのかわからない以上、路銀は絶対必要だと思うし……」

これは必要、これはしばらく我慢するとして……などとぶつぶつ洩らしながら、少女はこの先必要な品々を検討している。

「実はけっこう図太くできているのか？」

声に出すつもりのなかった思いを、つい口にしてしまったのはガネルオージェの不覚というものだった。

しかも、こういうときに限って、相手が聞き取ったりする。

「なぁんですってぇ？」

路銀が、路銀が——と繰り返していようと、本命の目的が親友救出という少女の据わった目はかなりの迫力をたたえていた。

「たいした度胸だと感心してるんだ」

それはあながち嘘でもなかったから、すんなりと口から滑り出た。

少女は軽く、肩をすくめた。

「何度も死にかけるような目にあったら、いやでも度胸ぐらいつきます」

それを、自分に対する皮肉だと彼が受け取ったのは……攫った挙句、風邪をひかせ、さらには肺炎にまで悪化させ、事実死なせかけた過去があったせいだった。

「そのことはもう謝っただろうが。類は友を呼ぶとはよく言ったものだ。執念深く、いつまでも昔のことをじくじくと……」

そう、そのあたりのことに関しては、この少女と、攫われた親友だとかいう娘はよく似ている、と思った。

親友と言いながら、ほとんどアラクセイトの保護者気取りだったあの娘は、ことあるごとにその件に対する厭味を連発してくれたのだから。

しかし――当たり前のことと言えばそれまでのことだが、彼がいま相手にしているのは、まだ言うかと呆れるほどに毒舌を披露する白金の髪の娘ではなかった。

「え？」

きょとんとした顔で、アラクセイトが顔をあげる。

それからようやく気づいたように、苦笑いを浮かべた。

「ああ、ごめんなさい、誤解招くようなこと、言っちゃいましたね。そうじゃなくて、わたし、子供のころ、喪月神の瘴気に攫われて殺されそうになったことあって……なんだか、この間も狙われて追いかけられたりしたものだから……」

何度もあんな気持ち悪いのに狙われたら、いやでも開き直ります。

きっぱりと言い切った少女は、小さく笑った。

「だから、そんなに神経質にならないでくださいね？　ガネルオージェさんのことは、あてにしてるんですから」

さらりと言われた内容に、ガネルオージェは引っかかりを覚えた。

このままふたりを見捨てるつもりはなかったが、はなから、同行してくれるに違いないとでも言いたげな、少女の思いこみはありがたくもなければ、面白くもなかった。

助けてもらって当たり前――という厚顔ぶりを発揮する人間が、彼は正直好きではなかったからだ。

少しは見直したところだっただけに、目の前の少女に対して腹立ちにも似たものを覚えた。

だから、そっけなくこう告げた。

「勝手に頭数に入れるな、迷惑だ」

と――。

しかし、アラクセイトは彼の苛立ちが理解できないらしく、小首をかしげた。

「勝手もなにも、こうなったら、ガネルオージェさんには一緒に来てもらうしかないじゃありませんか」

「だからっ！　そこでおれの意志を無視して巻きこむなと言ってるんだ！」

少しでも見直したのはやはり勘違いで、こいつは本当に馬鹿なのではあるまいか――などと、アラクセイトに非常に失礼なことを考えながら、ガネルオージェはまなじりをきつくした。

そうすると、彼の灰銀の瞳は、不思議な変化を遂げた。

黒みを増し、黒銀としか呼びようのない色彩へと変わったのだ。感情の昂りが招く現象で、そうなったときの自身を、彼は好きではなかった。

破壊衝動が、体の奥から迫り上がって来るような気がし、無性になにもかもを砕き尽くしたくなるからだ。

ここ数年というもの、よほどのことでもない限り、そうした状態になることがなかったから油断していた。いや、それともふたりの師匠の子供石を嵌めこんだ腕輪が不完全なせいだろうか……鰒の入った子供石には充分な力はなく、能力を抑える『枷』としての機能を、徐々に失いつつあるということか……。

（この小娘がいらないことを言うから……）

なぜ不愉快になったのかは考えず、彼はただただアラクセイトを疎ましく思った。

おかげで彼を包む空気は、かなり剣呑なものになったのだが、目の前の少女は動じた風を見

せなかった。

そのあたりは、ふたりの師匠とよく似ていた。

（こいつ、本当に敏感に出来てるのか？　この状態のおれを見て、泣きだしたやつだっていたっていうのに……。いや、別に泣かしてやりたいわけじゃないから、泣かなくったって、かまわないっていうか、かえってありがたいぐらいなんだが……）

と、どんどんわけがわからなくなる思考の迷宮にはまりながら、それでも憎らしさに――彼が嫌う言動を、少女が取ったのは間違いなく事実だったから――つい相手を睨めつけた彼に、少女はあっさり言い放った。

「なに、仏頂面してるんです？　ガネルオージェさんだって、早くミイノのこと助け出したいでしょ、石は全部、ミイノが持ってるんだし」

いや、別におれは――と言いかけて、彼はようやく重大なことを忘れていたことを思い出した。

「あ……？　石……？」

「なに、恍けてるんですか。どんな効力があるのかは知りませんけど、ナウルニールさまとトリノアークさまの子供石のなかでも特別に力の強いのが必要なんでしょう？　それ、譲ってほしいからって、ガネルオージェさん、わたしたちに会いに来たんじゃありませんか」

……そうだった。

確かにそうだった――のだが。

なにか、会話が噛み合っていないような気がするのは、自分の気のせいだろうか。

「ミイノ助け出さないことには、石だって取り返せないんですから、頑張ってくださいよね!?最初の約束とはかなり違う条件になってしまって、そのことは申し訳ないと思ってますけど、成功報酬って点は同じだし、無事、ミイノを助け出したら、絶対報酬上乗せの説得、しますから。ミイノは恩義には厚いから、命の恩人相手にけちったりしませんから、そのあたりのことは心配しなくてもいいですから」

言うだけ言って、またしても帳面との睨み合いに入った少女に、ガネルオージェが問いの言葉を投げかけるまでに、いささかの時間を要した。

「はなからひとのことを、頭数に入れてたのは……つまり、その事情があったから……なのか？」

好意や善意を無条件に信じ――いや、あてにしていたわけではなく？

少女は問われた内容を、完全には理解できていない様子だった。

ガネルオージェがなにゆえに機嫌を損ねたのかもわからずにいるアラクセイトを前にして、彼は自らの勘繰りすぎる性格と、彼女の考えなさすぎるそれの両方に対して、思わずため息を

洩らしてしまった。

だが、同時に、こんな状況の変化にも係わらず、契約履行を求める彼女の大胆さと眼力の鋭さ――件の『石』が、どれほど彼にとって重要なものか、見抜いておらねば、無条件に頭数に加えることなど、できようはずがないのだから――には感心した。

恐らくは――と、ガネルオージェは思った。

アラクセイトは生まれながらに――あるいは本能的に、生き延びるために必要なことを知っているのだ、と。

それは普段、抜けているようにしか見えない性格に隠れ、気づく者は稀だろう。

だが、確かにそれは彼女のなかに『ある』のだ。

そうでなくて、どうして、喪月神の瘴気に命を狙われながら、生き延びることができたというのか。

そんな話など、聞いたこともない。

「お前……実はちゃっかりしてるとか、言われたこと、ないか？」

決してほめ言葉には聞こえないはずのその台詞は、しかし再び帳面に没頭しかけていたアラクセイトの耳には、別の響きでもって届いたらしい。

「え？」

信じられないことを聞いたとばかりに、顔を上げた少女の黄橙色の瞳はきらきら、きらきらと輝いていた。

「え？　本当ですか？　いま、わたしってば、ちょっとはしっかりして見えます!?」

……違う。

見えない。

しかし、ガネルオージェは結局のところ、そんな彼女の勘違いを正すことができなかった。

それはそれは嬉しそうに、少女がはしゃいだからである。

「そうかー。わたしも少しは成長してるってことなのかな。昔から、うっかり大魔神だとか、ぽややん暴走大王だとか……ほんと、ろくなあだ名つけられたことなかったけど……。でも、そっかー、わたし、少しはしっかりして見えるんだ」

心底嬉しそうなアラクセイトを見ながら、ガネルオージェは「誰もそんなことは言ってない」と言ってやろうかと思ったが、結局やめておくことにした。

得体の知れぬ強敵との対決を前にして、彼女が意気に燃えるのは、歓迎すべきことだった。

勘違いでもなんでも、乗せておこう、と彼は判断した。

（なんとかも煽てりゃ……って言葉もあるしな）

失礼この上ないことを考えているガネルオージェの前で、なにも知らない少女は、（勘違い

の）感動を嚙みしめていた。

突然の呼び出しに、イダワントは全身を緊張させていた。

彼はこの豊珠にあっては、権力と財に恵まれた無敵に近い存在ではあったが、決して敵がいないわけでも、万能というわけでもなかった。

だが、それにしても、彼がこれほどに緊張するのは珍しいことだった。

その理由というのも、彼は知っていた。

人間が相手であれば、いかに強大な存在であろうと、怖じ気づく彼ではない。だが、人外の……それもかつてとは言え、神と呼ばれていた者を前にして、平常心を保つのは、彼にしても相当な努力を要する行為だった。

最初、宿る『器』の幼さと、微弱に過ぎぬ神気に不安や侮りを覚えたころの自分が懐かしいほどだ。これまで、数えきれないほどの無知で愚かな者たちを、彼は一片の感傷すら覚えず駒として利用し、使い捨ててきた。

まさか、そんな者たちの愚鈍さを羨む日が来ようとも知らずに。

日に日に増していく、少年の器から溢れ出す神気――その凄まじさ。
いまでは、正視するのも苦しいほどになっている。
呼び出しを受けたと聞いただけで、胸が早鐘を打つほどに――圧倒される。
強すぎる畏敬の念に、イダワントは少年の前に跪いた。
「ああ、イダワント」
少年が彼の名を口にする。
その声に宿る力ゆえか、彼はますます頭を深く垂れた。
「……お呼びと……」
「そうなんだ」
うなずく少年の傍らには、意識のない少女が横たわっている。
一度、攫うのに彼が失敗した、白金の髪の少女だ。
同志の若者が先走ったせいで生まれた、月犬を媒介に、ようやく攫ってきた娘だった。
独力でなしたわけでないことは腹立たしかったが、そのころにはイダワントも目の前の少年の恐ろしさに気づいていたため、我を通そうとはしなかった。意地にこだわった挙句――万が一にも――失敗した場合、今度こそ少年が自分を許さぬであろうことがわかっていたからだ。
頑なな愚者など、使い捨ての駒としてしか使えない。自身もそうしてきただけに、イダワン

トは無意味な拘りを切り捨てた。

だからこそ、少女は少年の傍らにあり、彼も以前と同じ地位に留まりつづけている。

だが、唯一誤算があったことは否めない。

手に入れたはずの少女の意識が戻らないことだ。

『お前のせいではない』

と、少年は告げた。

しかし、不完全な形でしか主の命を遂行できなかった事実は、イダワントの胸に重くのしかかり、同時に不安を覚えていた。

主から授けられた力を、自分が十全に使いこなせなかったのではないか——というそれは、自身への不信を育む。他者の無能を激しく憎む彼は、己が中に同じものを見いだすことに耐えられない。

やはり、自分のやり方に不備があったのではないのか。それを見抜いた主が怒りと失望を覚え、ここに呼び出したのではないのか。

不安という名の毒に冒されたイダワントには、一瞬が永遠にも思える時間だった。

そこから彼を解放できるのは、銀髪の少年だけだった。

そして、少年は完全には声変わりを終えていない、まだ高さを残す声で告げた。



「そんなに緊張することはないよ、イダワント。別に責めるつもりで呼んだわけじゃないんだから……」

その言葉に、思わず彼は安堵の息をついた。

少年が、くすくすと笑う。

「ただ、君にやってもらいたいことがあってね……」

意味深長な、わずかな沈黙――。

その後少年は、願いという名の命令を口にした。

「羽虫がね……けっこう鬱陶しくてね。姉上たちにも火傷してもらうためにしばらくは放っておくつもりだったんだけど……なんだか、それも面倒になっちゃってね」

君に、駆除してもらってもいいかな？

イダワントは床に額をすりつけるようにして答えた。

「……御方のお望みとあれば……」

彼の脳裏に、ふたりの人物の顔が浮かんだ。

ひとりは、黒髪に灰銀の瞳を持つ、金剛石の子供たる青年――。

もうひとりは、紫紺の髪に黄橙色の双眸の少女だ。

石墨の子供として生まれながら、能力を発現させる際、石墨ばかりでなく金剛石まで生み出

すという、これまで前例のない存在だった。
そのふたりを片づける――言葉で言うほど簡単なことではない。
（だが、やれと……御方がおっしゃるのだ……）
なんとしても、やり遂げなければならなかった。
自らの有能さを主に示すために――そして、来るべき新世界における、より強大な権威を手に入れるために。

22

「たどれなくなったーっっっ!?」

信じられないと顔に書いて、叫んだのは金剛石の子供である青年――ガネルオージェだった。

「お前、本気かっ!?　あれだけ大丈夫だって言ってたくせに!?」

同行の少女に詰め寄る顔には『この役立たず』と書いてあった。

しかし、青年とのふたり旅のなかで、少女もかなり鍛えられていた……ようだ。

「あのときはっ！　たどれるって思ったし、出来そうだったんですっ！　実際、ミイノに近づいてるのはわかるんですっっ！　問題なのは……」

そう、問題なのは、ソラミイノの居場所に近づくにつれ、アラクセイトの感査能力がどんどん信頼性を失っていくことだ。

「変なんです」

覚えた感覚をうまく言葉にできない少女は、もどかしさに焦れながら、それでも必死に言葉を探して説明しようとする。

もし、一緒にいるのが珊瑚コンビの、彼女の師匠たちであったなら、気配をたどろうにもたどれない彼女の苛立ちや、近づくにつれ感覚がまどわされるという矛盾の裏に秘められたからくりに気づいてくれたかもしれない。

しかし、アラクセイトにとって不幸なことに、そばにいるのは、繊細な感覚も、長年の経験も……どちらの持ち合わせもない、はっきり言って護衛以外には役立たない青年ひとりだったのだ。

おまけに、そちら方面の才能がかけらもないと、早々に自覚してしまった青年は、想像力を働かす努力すらしようとはしない。

「つまり、お前の勘違いって線が高いわけだよな」

とは言いつつも、顔にはしっかりと「ちょっとでも、信じる気になったおれが馬鹿だった」と書いてある。

アラクセイトがむかっ腹を覚えたのは当然のことだった。

「近いのは確かなんですっっ！　ただ、近づくにつれて、なにかに邪魔されるような……そんな気がするってだけで……」

「結局わからないことに変わりはないんだろう？」

身もふたもなく言い切られ、アラクセイトは頬を紅潮させた。

「そ……れは、そうですけど……」

先日、珍しくも――それは彼女の勘違いだったのだが――嬉しがらせを言ってくれたと思ったら、今日はこの毒舌……。

ガネルオージェという青年は、どうしてこうも自分の気分を振り回してくれるのだろう。別に甘やかしてほしいとは言わないが――ある意味、そんなことになったら、嬉しさより気色悪さを覚えそうだ――せめて言い回しぐらいは考えてほしいと思う。

落ちこぼれの劣等生として過ごしてきた日々が長い彼女は、そうそうのことではへこたれないようになってはいたのだが、どういうわけか、この青年の言葉には、感情が大きく揺さぶられてしまうのだ。

（ミイノもけっこう毒舌なんだけど、同じようなこと言われても、そこまで落ちこんだりしないんだけど……なあ？　これって、やっぱり慣れの問題なのかな？）

だとしたら、そのうち彼の言葉に振り回されることもなくなるのだろうか――と、そこまで考えた彼女は、それはそれで嬉しくないと思った。

親友の毒舌はともかくとして、貶されることに慣れてしまうのは、やはり人間として悲しい

ではないか。

そうしてアラクセイトは、この不毛な考察をひとまず高く棚に放り上げることにした。

なにより優先すべきはソラミイノの救出なのだ。のんびり落ちこんでなどいられない。

「ガネルオージェさん、結界張ってもらえますか」

突然の彼女の言葉に、青年は訝しげに首をかしげた。

「結界……？」

なんのために？——と、顔に書いてある。

「もう一度、感査してみるんです。ただ、腰据えてやろうとすると、どうしても体がお留守になっちゃうし、もし、向こうが妨害してるのなら、もしかしたら、邪魔が入るかもしれないし……それに、やっぱりわたしの石墨より、ガネルオージェさんの金剛石で張った結界のほうが安全性が高いと思うんですよね」

だから、お願いします——。

これには青年もあきれたようだった。

「感査って、ここで……か!?」

周囲は木立ひとつ見えない……つまり、身を隠す場所もない、大変に見通しのよろしい草原だった。

「そんなもの」

開き直った者勝ちとばかりに、アラクセイトは言い切った。

「隠れたって、あちらの力を考えたら、あんまり意味なさそうだし……第一、村か街でやったあげく、この間と同じ轍を踏むのは遠慮したいですもの。放火犯だとか、爆発犯扱いされるのは、さすがにもう遠慮したいです。お尋ね者にはなりたくありません」

ガネルオージェさんだって、そうじゃありませんか？

断固とした彼女の言葉に、青年もすぐには反論できない様子だった。

「そりゃあ……あんな得体の知れない相手だから……まあ、言いたいことはわからないでもないが……しかしな」

敵は目に見えない力ばかり使ってくるとは限らないだろうが。

正論である。

いや、たとえそうではなくとも、『神殿の保護を受けない』聖石の子供が、いかに悪党たちの目に魅力的に映り、そうした獲物を見つけた輩がどのように動くのか——それに関しては、ガネルオージェと再会してすぐのころに思い知らされていた。

「ええーと、だから、一応結界には隠形の効果も加えておくってことにして……」

おれは出来ないぞ——という青年の言葉は、しかし彼女にとっては予想の範疇内のものであ

ったため、「あ、じゃあそれは自分でやります」と言った。
「だけど、何事も完璧というわけじゃないし、万が一のことも考えたら、ガネルオージェさんには、そばにいてほしいかな！……なんて……」
「読めたぞ」
低い、低い声を青年が洩らしたとき、その声に宿る剣呑な響きに、アラクセイトは思わず首を竦めてしまった。
「八方塞がりになったものだから、お前、おれを巻きこんで、わざと餌になる気だな!?」
「ええっと……」
そんなことはない、気の回しすぎだ——と言おうとして、ガネルオージェの目を見たアラクセイトはその無駄を悟った。
青年の双眸は、いつもよりずっと黒みを増し、黒銀の輝きを放っていた。
怒っているのだ。さしてつきあいが長いわけではないのだが、こうなったときのガネルオージェは怖い。彼のなかに眠る力が、彼という枷を外して暴れたがっているように見えるからだ……屋敷を敷地ごと破壊しつくしたという力を、真っ向から受けるなど、想像するだけで冷や汗が流れる。
「だって、ほら、虎穴に入らずんば虎児を得ずって言葉もあるじゃないですか」

「その虎穴にひとを騙して連れこもうという根性が気に食わんと言ってるんだ」
「騙すだなんて、人聞きの悪い……黙ってただけじゃありませんか」
「同じことだろうがっ！」
怒り心頭と顔に書いた青年の怒声に、しかしアラクセイトは怯まなかった。
はっきり言って、すでにそんな状況ではなかったのだ。
「なら、ガネルオージェさん、ほかにどんないい方法があるのか、教えてくださいよ。納得できたら、そちらに従いますから」
挑むように切り返した彼女に、青年は苦々しげに舌打ちした。
「……開き直りやがって……」
（勝った！）
と、アラクセイトは思った。

金剛石によって築かれた五芒結界のなかで、少女が瞑目し、端座している。
それを少し離れた場所から見つめながら、ガネルオージェはふう、と息をついた。

結局、アラクセイトの提案以上のものを出すことができなかったせいで、不本意ながら虎穴に連れこまれてしまった青年は、彼女が集中に入るまで、苦虫を噛みつぶしたような顔を崩さなかった。

せめてもの反撃――というよりは嫌がらせだ――だったのだが、いまではその表情は一変していた。

楽しげとは、決して呼べないが、なにが起こるのか、興味をもって待っている――といった感じだ。

実際、彼はこれから起こるであろう、非日常的な騒ぎを、心待ちにしていたのだ。

ざわざわと、心が乱れる。

瘴気に敏感に反応する琴線の持ち合わせがないことははっきりしているので、だから、これは別種の『なにか』なのだろうと思う。

実を言えば、ガネルオージェがアラクセイトにつきあっているのは、師匠たちの子供石を譲ってもらう以外にも理由があった。

先日、アラクセイトを襲った月狼もどきと戦った際、それまで感じたことのない高揚感を覚えたのがそれだ。

意識が澄み渡り、戦いに集中できた。力及ばず、殺されそうにはなったものの、あのとき感

じた昂りは、そう簡単に忘れられるものではなかった。

あのときの感覚を、もう一度味わいたい。そうして、今度こそ、その正体を見極めたい、と彼は思っていた。そのためにも、明らかに『あちら側』に狙われている少女たちと行動をともにするのは好都合だった。

いろいろと、気に食わないことも多い娘たちだが、ひとかけら程度の情が湧いているのは確かだった。自分らしくないと思いつつも、炎に包まれた宿に飛びこんでしまうぐらいには。

だが、あの感覚へのこだわりは、まったく別の問題だった。

ひどく惹かれている……ような気もすれば、かけらも残さず滅ぼしてしまいたいような、そんな気もするのだ。

添いたいのか、滅ぼしたいのか——。

恐らくは、すぐにわかる。なぜなら、『それ』が近づいてくるのが、彼にはわかったからだ。

突然、火柱が立った！

しかも、ただのそれではない。

（銀色の……炎!?）

無数の火の粉をまき散らしながら、銀の炎が燃え盛る。

そして、その火の粉は、どうしたわけか、ガネルオージェと……結界に包まれているはずの

アラクセイト目掛けて降りそそぐのだ！

火の粉の前に、剣など役には立たない。

「ちっ」

と、舌打ちしつつ、彼は懐に手をのばした。

（水気をたたえた子供石……黒瑪瑙が、確かまだあったはず……）

そう思い、革の袋の口を緩めた瞬間――なにかが破裂するような音が周囲に響き渡った！

「な……っ!?」

信じがたい現象を前に、ガネルオージェは目を瞠った。

咄嗟に放り出した革の小袋は、凄まじい勢いの炎に包まれていたのである。

「しまった……！　金剛石か……っ！」

金剛石は、燃える。

しかも、それはただの金剛石ではない。聖石の子供石である。

宿る力ごと飲みこんだ炎の勢いはいや増すばかり――。そしてガネルオージェは、金剛石があるのはここばかりではないことを思い出し、背後を振り返った！

（五芒の結界石……！）

もしも、炎がそれに引火したとしたら――!?

結界が崩れるだけではすまない。
感査に集中している、無防備な少女の体は、瞬く間にこの炎に飲みこまれてしまう――！
だが、彼は気づくのが遅すぎた。
振り返った彼の目に映った光景――それは。
結界ごと、銀の炎に飲みこまれようとしている少女の姿だった。
「逃げろ！」
声の限りに、ガネルオージェは叫んだ。
熱風がそんな彼に襲いかかり、喉を焼いたのは、次の瞬間のことだった――。

23

豊珠はバルヴァローズ最北に位置する大陸である。
その冬は長く、夏は短い。
さらには、肥沃とはいいがたい土壌の地域がほとんどで、穀物のたぐいを他大陸からの輸入に頼る国も少なくない。
無論、南の地域では、多くの緑を目にすることも珍しくはない。針葉樹はもちろん、春から夏にかけての時期、大地は緑に覆われ、可憐な花が色とりどりに咲き誇る……。
だが、それにも限りがある。
間違っても、広葉樹が自生することはないし、あざやかすぎる色彩の、大輪の花が咲くこともない。
それらは、この豊珠の大地と気候の両方にそぐわないものなのだ。
（なのに、この家の庭ときたら……）

窓ごしに見える橡や橘の木々、どことなく王冠の形を思わせる真紅の鬱金香の咲き乱れる花壇……事情を聞いたいまでも、正直なところ、ここが豊珠だとは信じられない思いがする。

（まあ、ある意味豊珠とは呼べない場所ではあるけれど……）

見ているだけで、自分のこれまで培ってきた常識を疑いたくなる景色から目を逸らして、アラクセイトはそっと息をつく。

その両手は盆を持っており、そこには食事と、食後服用の薬湯の入った碗が載っている。数日前、結果的に無理やり虎穴に連れこんだせいで、大火傷を負わせてしまった青年のためのものだった。ちなみに薬湯は、この豊珠とは思えない庭を管理している女性の手によるものだったりする。

効き目と言えば驚異的を通り越し、イカサマめいており、到底人間の技とは思えない代物である。もっとも、このでたらめな庭のありさまと、本人の申告した『身の上』を思えば、いまさら驚くには値しないのかもしれなかったが……。

（まあ、ガネルオージェさんが早くよくなってくれるのは大歓迎なんだけど……）

その思いに嘘はない、

ないのだが……。

ふう、とひとつ息をつき、アラクセイトは覚悟を決め、ガネルオージェが療養中の部屋の扉

をノックし、開けた。
それと同時に、剣呑な視線が突き刺さってくる。
無理からぬことだと思っても、慣れることはできない。なにしろ彼が大火傷を負ったのは、自分の無謀な計画のせいなのだから。
しかも、仕掛けた自分はほとんど無傷で、彼だけが傷ついたのだ。非難されても仕方ない。
「ガネルオージェさん、ご飯、持って来ました。お加減のほうはいかがですか……？」
答える声は不機嫌この上ないもので――台詞はどこまでも正直なものだった。
「悪い」
答える青年の灰銀の双眸には、「恨んでやる」とでも言いたげな光が宿っていた。
（ああ、やっぱり怒ってる、怒ってるったら怒ってる……！）
いっそ、自分が彼の代わりに火傷を負ったのならよかったのに――そんなことを思いながら、アラクセイトはこの、豊珠とも思えぬ場所に迎え入れられたときのことを思い出していた。

「無茶をする……」

あきれたようなその声は、どこか懐かしくアラクセイトの耳に届いた。

そして、やさしく髪を撫でてくれる指――。

「お母さん……？」

知らずつぶやいたその声で、意識を取り戻した彼女は、頭を撫でてくれた手の主が、母でも知り合いの誰でもないことを知った。

咄嗟に状況が把握できなかった。

そんな彼女に、そのひとは安心させるような微笑みを浮かべ、「もう少しお休みなさい」と――そう告げた。

限りなく黒に近い褐色の髪と瞳を持つその女性は、三十代半ばに見えた。

顔だちも背格好も、どこが似ているというわけではなかったが、なぜか母を思い出した。触れてくれる指の感触が、同じ種類のやさしさをたたえていたからだろうか……。

「あ……わたし……？」

首をかしげ、彼女は必死に記憶をたどろうとした。

だが、うまく思い出せない。

「大丈夫」

と、もう一度そのひとがささやいたとき、不意に脳裏に銀色の炎が浮かんだ。
「そうだ……！　わたし、ミイノの居場所を捜すために感査して……そうしたら……」
あの、恐ろしい炎に襲われたのだ！
「ガネルオージェさん……ガネルオージェさんは……っ!?」
起き上がろうとしたアラクセイトの肩を、そのひとの手が押さえた。
「無事だ、別の部屋にいる。会いたいのなら、後で会わせてやるから、お前はもう少し休むことだ。瘴気に触れた傷を放置しておくなど、無茶にもほどがある。処置はすませたとは言え、まだ無理は禁物だ。早く動きたいのなら、いまは休むことだ、わかったか？」
口調は淡々としていたが、それ以上逆らうことを許さない、断固とした力に溢れた声だった。
結局アラクセイトはその言葉に従い、再び寝台に横になった。
そして次に目覚めたとき、アラクセイトのそばにその女性はいなかったのだ。
勝手に動き回っていいものかどうか、アラクセイトが躊躇わなかったと言えば嘘になるが、結局のところ、彼女はあの手の主と連れの行方を知るために寝台を離れた。
どうしても繋がらない記憶のかけらを取り戻すため、そうするべきだと本能が指し示したのだ。

そうして、再び、救い主とおぼしき女性の姿を、庭の一角に認めたとき、彼女は息を呑んだ。

そのひとは花壇に植えられた花を支配していたのだから。

真紅の鬱金香が、風もないのに彼女に向かってそよいでいた——まるで主を慕うかのように……。

豊珠では育たないはずの鬱金香——その花に慕われる女性——。

その光景を目にした瞬間、アラクセイトは相手が人ならぬ力を持っていることを確信した。

はたして——。

彼女の視線に気づいたその女性が口にした名は、人間のものではなかった。

「わたしのことは、アスカニーリと呼んでくれればいい」

アスカニーリ——それは大地を司る女神の名。

そして彼女はこう補足した。

自分はアスカニーリ女神のかけらを核として誕生した、『死点』——かつて女神が兄神のために用意した休息地——の番人なのだ、と。

「お前たちは運がいい」

とも言った。

「お前たちを襲ったのが、死点に宿る気配を纏っていなければ、助けてやろうとは思わなかっただろうからね」

そうして女神の分身は、アラクセイトとガネルオージェに、狙われる不安のない、療養のための場所と時間と得難い情報を提供してくれたのだ――条件つきではあったけれど。

女神の化身の住まう場所に宿る力のせいなのか、それとも『彼女』自身の知識と力のおかげなのか――アラクセイトの傷にしろ、ガネルオージェの火傷にしろ、その回復ぶりは目ざましいものがあった。

特にアスカニーリが手ずから煎じてくれる薬湯の威力には、目を瞠ったアラクセイトだった。

一口飲むだけで、体の中心がかっと熱くなったかと思うと、次の瞬間には全身に力が漲るのを感じるのだ。冗談ではなく、これならどんな病気も怪我も、裸足で逃げ出しそうだと思ったほどだ。

いまも、ガネルオージェに薬湯の入った木碗を手渡しながら、ほう、と息をついていた。

「これって、多分、黄玉の薬湯ですよねえ……」

薄紅がかった綺麗な黄色は、最高級の黄玉の色彩そのものだった。

「もったいないとか言うなよ、お前はどうであれ、おれはまだ、こいつが必要なんだからな」

ところどころ、包帯の見える青年の言葉に、アラクセイトはふるふるとかぶりをふった。

「言いませんよ、そんなこと。ただ、こんな威力たっぷりな薬湯作れるなんてすごいな……っていうか、羨ましいなって。女神の化身である方を羨むなんて、とんでもなく罰当たりだってことはわかってるんですけど……」

つい、ため息が出てしまう。

幼いころの記憶を取り戻したおかげで、以前ほど力を暴走させることはなくなった彼女だが、どうしたことか、聖石の子供石で薬湯を作ることだけは、いまだに出来ずにいるのだ。他人の石を使っての薬湯は、使徒に選ばれた者にしか出来ないことはわかっているが、彼女の場合、自分の子供石に関してなら、使徒ではない『聖石の子供』でもできるはずなのに……それができない。

そのことを、アラクセイトはけっこう気にしていたのだ。

そんな彼女の心中を知ってか知らずか、黒髪の青年は、さしたる感慨もなさそうに肩をすくめた。

「そうだな、こんな薬湯が作れたら、お前としたら万々歳だろうな」
なにやら含みのある口調に、アラクセイトは青年を振り返る。
「ガネルオージェさん……？」
「これだけ滋養強壮効果たっぷりな薬湯があれば、どんな無茶だってし放題だ、いくらだって虎穴に入っていけるもんな」
「ガネルオージェさんっっっ！　わたしはそんなこと……っ！」
考えてなんかいませんっっっ！
必死に叫んだのだが、青年が信用してくれたかどうかは謎だった。なにしろ、前例が前例である。
「だが、できるに越したことはないとは、思ってるんだろう？　作り置きできれば、最悪の場合、自分ひとり、どこまでだって暴走できるもんな」
見抜かれている。
（なんだって、こういうときに限って、鋭いのかな、このひとってば）
少ーしばかり……どころでなく、相手のことを恨みがましく思う。
開き直ったつもりだった。ソラミイノを救うためなら、利用できるものは残さず利用しようと……心に決めたつもりだった。

けれど、それはあくまで、すべての負担が自分にかかる場合を想定しての決意にほかならなかったのだ。

あの銀色の炎に包まれて……生死の境を彷徨うような傷を負ったのは、アラクセイトではなくガネルオージェだった。

もし、地神の化身が救いの手を差し伸べなかったら、彼の命は尽きていたかもしれなかったのだ……。

そのことを思うたび、心が痛む。

けれど、もういいとは……もう充分だから、ひとりでも大丈夫だから——とは言えない。

アスカニーリの化身から聞いた、敵の持つ力はあまりに大きく、到底自分ひとりでどうにかできるものではないのだから。ガネルオージェの力を借りても十全とは言えないだろう……相手は、かつて神であった者の意識を宿すもの、なのだから。

そのことは、ガネルオージェも知っている。この家と庭の主人であるあの女性は、ふたりの前で——二度手間は面倒だと言って——説明してくれたのだから。

ただ、ガネルオージェは一部得心がいかないようだった。

「なあ」

声をかけられ、アラクセイトは「はい？」と振り向いた。

「確かにあのひとは恩人だし、そのことでどうこう言うつもりはないんだが……だが、なぜなんだ？　死点のなかでも月神気に押しつぶされないよう、地気絶大な守り石と、死点浄化に必要不可欠の切り札まで、何だっておれたちに委ねるわけだ？　どう考えても、自分でやった方が早くないか？　確かに喪月神の意識を宿してるやつは、人間だという話だが、それで言うなら、ここにいるあのひと……も、人間だろう？」

　人間の肉体という名の器に、女神のかけらを宿した存在……そう、確かに肉体的な問題に限って言えば、あの女性は人間なのだ。

「……あんまり長いこと、ここを守ってきたものだから、随分土地の影響を受けたんだって、仰ってました。体に宿る神気が強くなりすぎたから、却って干渉できなくなったんだって……異なる神気をたたえた力がぶつかったりしたら、いまのバルヴァローズでは、どんな混乱が起こるかもしれないからって……そう仰いました。多分……そうなった場合、ガネルオージェさんが以前起こしたっていう被害以上のことが起こる可能性が高いんじゃないかな、とか……ちょっと想像しただけで、身の毛がよだったので考えないことにしたんですけど」

　そう答えた彼女に、ガネルオージェは苦い顔をして、「なるほど」とうなずいた。

「そういうことなら、仕方ない……か……」

　ぽつりと、そうつぶやいた彼の言葉に、アラクセイトは複雑な顔でこう応じた。

「そうです！」
怒気もあらわな少女の答えに、彼は訝りを覚えたらしく、こう問いかけてきた。
「なに、尖ってるんだ。まさかとは思うが、焼き餅でも焼いてるんじゃないだろうな？」
揶揄もあらわなその言葉に、アラクセイトは顔を真っ赤にして怒鳴り返した。
「なに、馬鹿なこと言ってるんですか――っっっ!?」
ともあれ、三日後――。
彼らふたりは、アスカニーリ女神の化身のもとを離れ、敵地へ乗り込むこととなる。

少女は夢のなかをたゆたっていた。
夢のなかには、すべてが揃っていた。
愛してくれた家族、楽しかった時間、それを共有した友人たち……。
大好きな、ひとたち……。
みんな、そばにいる。
大好きな兄も、手がかかってどうしようもないと思いながらも、見捨てるに見捨てられない

厄介な親友も……。

みんなが、笑っていた。

笑っていられる世界だった。

（なんて、素敵な……）

なんと心地よい場所であることか。

快い夢に耽りたいと思う彼女の意識に引っかかるのは、どこからともつかず、聞こえてくる……壁を爪で引っかくような音だった。

カリカリ、カリカリと、音は聞こえる。

聞いているうちに、音が単なる音ではなく、言葉に変換されてしまうような気がして、正直なところ、不快だった。

（なによ、なにが言いたいの!?）

問い返しても答えはない。

（いったい、なんなの!?）

なぜ、邪魔するの!?

なぜ心地よいままにしておいてくれない!?

いいかげんにしてっっ！

「放っておいてよっ！」

叫んだ少女の耳に、『声』が届いたのはその瞬間のことだった。

「ソーラ……」

忘れようにも忘れられないひとの、自分を呼ぶその声――。

「……兄さま……？」

はっと息を飲んだ彼女の耳に次に届いた声は――。

「ミイノ！　ミイノ、ミイノ、ミイノッッッ！」

切迫した響(ひび)きを孕(はら)んだ――それは、親友のもので。

（どうして――）

と、彼女――ソラミイノは思った。

（どうして、夢のなかぐらい、わたしをのんびりさせてやろうって気にならないわけッ!?）

彼女の機嫌は、このとき、最悪であった――。

24

眠りつづける少女の傍らで、少年――かつてサイサロールと呼ばれていた魂の主――はこの予定外の事態について考えていた。

なぜ、こんなことになったのか――。

母神セイトーリによって命を絶たれた後、彼の意識は核を失い、長いこと、このバルヴァローズ中に拡散したままたゆたっていた。

その間のことはよく覚えていない。ただ漠然とした感覚のままに動いていたように思う。欲しければ奪い、嫌悪を覚えるものは始末し、楽しげなことを見つければ、子供のように遊んでいた……。

人間という生き物は、存外誘惑に弱く、また、そうでない者もたやすく『瘴』を生み出すのに気づいたのがきっかけだった。

人間を堕とすのは楽しかった……のだと思う。記憶がなく、また思考力を取り戻したいまで

は、よく理解できない感覚なのだが。

ただ、そうして漫然と時を過ごしながらも、再び以前の自分に戻るための準備はしていた……そのために必要な存在を捜していた。

ただ人に宿ったところで、以前のように思考し、力を揮うことがかなわないことは最初からわかっていた。人間の身に、神気は強烈すぎるもの——宿す間もなく押しつぶされ、用をなさなくなってしまう。

神気に強い耐性を持つ人間が必要だった。

だが、そうした者は、すでに彼の姉妹神の加護を得ており、取りこむのは容易ではなかった。たとえ途中までうまくいったとしても、なぜか彼らは最後には、自らの滅びを選ぶ——空神パルムローリの断罪の剣による死を。

だからこそ、瀕死の重傷を負ったこの『器』が、『隠されたる水脈』に乗って、ここに流れついたとき、彼は歓喜せずにはいられなかった。

満身創痍の少年の肉体には、神気に対する強い耐性が備わっており、しかもその魂には、深い女神への……否、神殿への不信と疑問が根付いていた。同じ女神を信奉する立場でありながら、神殿における派閥争いのために、襲撃されたがためだった。傷を癒していくうちに、ほかにも色々と見えてくるものもあった。

少年が生まれた一族が、アスカニーリ神殿における最大派閥であること――その地位を守り、また拡張するため、長老と呼ばれる者たちが陰謀術策に身を浸していること……一族の繁栄という目的の前では、個人などあくまで駒にすぎないこと……などなど。

そんな身内のありように、少年は失望と怒りを感じていた。

だから、彼を選んだのだ。

アスカニーリを信奉する神殿を内部から喰い荒らすのに、これ以上の駒はなかった。ただしそうするためには手間隙がかかった。この地に宿るのは、純粋な神気――致命傷を負った彼の傷を速やかに癒す行為には、姉妹神たちが与える以上の加護の証を彼に残してしまう危険性があった。

細心の注意を払い、すべての傷を癒した後、彼――サイサロールは、器とするために救った少年を手に入れようとした。少年の魂を、この時点でも消滅させずにいたのには理由があった。彼に成り代わるための情報が、まだ十全ではなかったためだ。

ところが、そこで、誤算が生じたのだ。

一族や神殿のあり方に強い不信と疑問を覚えながら、彼のなかにはサイサロールの支配をよしとしない、別種のこだわりが存在していたのである。

婚約者である少女への一途な愛情――。

ならば、それを粉々に砕いてやろう――とサイサロールは思った。
そのために、完全に治癒した少年の体を、五年近くも眠らせた。
そうして、五年の時を経て、帰還した少年は残酷な現実を目の当たりにし、衝撃を受けた。
生涯を誓った少女はすでに他人の妻であり、しかもその夫との子供を身ごもっているという、その現実に。
その瞬間、サイサロールはその器の支配権を手に入れた。
ストリーヴの一族を内側から食い荒らすという考えには、すでに魅力を感じなくなっていた。
いや、それどころではないと気づいたというべきだろうか。
知らぬうちに、この世に生み出されていた危険分子の存在に。
すべてを断ち切り、すべてを焼き尽くす金剛石のふたりの子供。
姉妹神たちが生み出した二振りの剣――彼を滅ぼし得る脅威の存在。
彼らを放っておくことは出来なかった。そして幸いにも、彼らは最強の力を与えられたがゆえに、無欠ではなかった。均衡の取れない不安定さを彼らは持っていた。
だからこそ、この少女を攫ったのだ。
この器を質に、味方に引き入れられればよし、そうでなければ始末してしまえばよい。

だのに、少女の意識はこの地に宿る月神気から自らを守るかのように、深く沈みこんでしまった。

しかも、完全に支配したはずのこの肉体は、妹である少女の命を奪うことを強固に拒む。いや、肉体だけではない。配下に始末させようと考えても、どうしてもそれを口にすることができないのだ。

忌ま忌ましいことこの上ない誤算だった。

さらには、これまで感知することもできなかった――アスカニーリの分身。あんなものが用意されていたとなると、これからは慎重に動かざるを得なくなる。

「……いや……」

そうでもないか、と少年はつぶやく。

一瞬遠い目をした後、彼はかすかに微笑んだ。

「イダワント」

配下を呼ぶ声には、楽しげな響きがあった。

「は……」

答える男の双眸には、言い知れぬ畏怖の光がある。

そんな男に、少年は小さく笑いながら告げた。

「先だってのことは気にする必要はないと言っただろう？　次に頑張ってくれればいいんだ……そう、今度こそね」

男が深く頭を垂れた。

「必ずや――」

「頼むね……もう、きっとすぐだから……」

うなずく少年の銀の瞳には、悪戯を企む子供のような光が浮かんでいた……。

硬い岩盤に覆われた地下水道は、常春を思わせる『アスカニーリの庭』からは想像できないほどの冷気をたたえている。この場所については詳しく教えてもらい、充分な装備をしてきたつもりだったというのに、アラクセイトは肌が粟立つのを感じた。

（ううん、違う……鳥肌がたつのは、実際の寒さのせいじゃない……）

恐ろしいほどの力がこの場に溢れているためだ。

かつて月神気であったもの――いまや瘴気と交じり合い、言葉では表現できぬモノに変化してしまった強大な空気が、周囲に充満している。

なんと強く……そして、なんと恐ろしい力なのか。

（アスカニーリさまからいただいた黄玉がなかったら、きっと、この空気に触れただけで動けなくなってた……）

いや、たとえそれがあったとしても、もしもここにいるのが自分ひとりであったなら、やはり一歩も動けなかったかもしれない。

（ガネルオージェさんが、一緒にいてくれて、よかった……）

感謝の念とともに、ちらりと同行の青年に視線を投げた彼女は、次の彼の台詞を耳にしたとたん、今度は彼が羨ましくなった。

「なあ、おい、お前。お前、イイタールの娘なんだろう？　灯にできそうな炎とかぱっと出せないか？　どうにも、こうも真っ暗じゃ、どこにどう進んでいいのかもわかりやしない」

真っ暗――？

とんでもないことだった。

アラクセイトの目にははっきりと、周囲の様子が映っており、この場を満たす力のもたらす圧迫感のせいで、胸は早鐘を打ちっぱなしだった。

（こ、この感覚を知らずにいられるなんて……なんかちょっと……うらめやましいかも）

もちろん、自分が彼並みに鈍かったら、到底ここまでたどりつくことはできなかったのだか

ら、本気で羨ましく思ったわけではなかったが、恨めしく思ってしまうのは本気だった。

「試したくはないです。ガネルオージェさんにはわからないかもしれませんけど、ここって、月神気と瘴気が混ざっちゃっててすごい状況なんです。いくら、多少は制御できるようになったからって、怖くてこんなところで炎なんて出せません。瘴気を媒介に粉塵爆発もどき、起きてもおかしくありませんもの」

その言葉に、ガネルオージェはさすがに黙ったが、ではどうやって進むのか——という話になったときには、かなりの難色を示した。

なにしろ、手を繋いでアラクセイトが先導するしかなかったからである。

沽券に係わるとでも思ったのかもしれないが、アラクセイトは頓着しなかった。というより、すでにそんな状況ではなかったのだ。

「どうせ、死点は月光たっぷり溢れてるんですよ。そこにたどりつくまでの辛抱じゃありませんか。わたしは口外しませんし、ほかに見てそうなひとなんて敵なんですから、そのひとだかそのひとたちだかは、ぶった斬って口封じしちゃえばいいじゃありませんか」

かような剣呑な言葉を、抵抗なく口にできるぐらいに、彼女は煮詰まっていたのである。

そして——煮詰まっているか否かはさておいて、彼女のこの提案に一も二もなく飛びつく程度には、ガネルオージェは喪月神とその配下が大嫌いだった。

「……そうだな」
数瞬の後、そう答えた青年は、おとなしくアラクセイトの先導に従った。
目的地は死点――そこにソラミイノと敵がいる。
（ミイノ……どうか、どうか、無事でいて……！）
祈りながら、アラクセイトは足を踏み出した――。

瞼が重かった。
眠い……違う。目覚めたくない。
目を開きたくなかったのだ……開けばどんな現実が飛びこんでくるか、わかっていたからこそ――。
けれど、呼び声は大きくなるばかり――。
（ソーラ、目を覚まして）
やさしい、やさしい、兄の声。
（ミイノ！　ミイノったらっ！　起きてよ、起きてったらっ！）

また問題でも起こしたのか、必死に呼びかけてくる親友の声。

アラクセイト――。

声の主がわかったとたん、猛烈な怒りをソラミイノは覚えた。

（アーク、あなたってひとは、どうしていつもいつも、こう……）

「困ったときの神頼みよろしく、わたし頼みに走るわけ――ッッッ!?」

そう、叫んだ自らの声で、彼女は覚醒した。

目覚めたそこは、見知らぬ場所――。

心臓が軋むほどの強烈な神気と瘴気の融合した空気のなかで、彼女が最初に目にした顔は……幸か不幸か、見知らぬもの――ではなかった。

「おはよう」

と、その少年は笑った。

髪も瞳も、宿る意識の強大さゆえに、色彩をも変えてしまったそのひとの顔を見るなり、彼女は両手で口元を覆った。

（兄さまだけど……兄さまじゃ、ない……！）

けれど、彼女を襲う衝撃は、これが最後ではなかったのだ。

前触れもなく銀の炎に襲いかかられたとき、はっと息を飲んだアラクセイトは反射的にガネルオージェを振り返っていた。
「ガネルオージェさんッッ!?」
前回の襲撃で、この炎のせいで彼が大火傷を負ったせいだった。
しかし、彼女の心配をよそに、ガネルオージェは平気な顔で「おう」と返してきた。
お守り石の効果絶大といったところだろうか。
「こっちは大丈夫だから、お前はお前の仕事をしろっっ！」
すぐさまアラクセイトは「はいっ！」と答えた。
彼には出来ない、彼女にしか出来ない方法で、敵の本体の居場所を探せと言われているのだ。
俄然、張り切ったアラクセイトである。
なにしろ、前回は役に立てなかったばかりか、アスカニーリの助けがなければガネルオージェを焼死させていたところなのだ。今度こそという彼女の意気込みは、相当なものがあった。
（探さなきゃ……。絶対、近くにいるはずなんだから……！）

前回とは状況が違う。

これほど強烈な神気のなかで力を揮おうとするなら、本体がそばにいなければおかしい。些細なことがきっかけで、どんな事態が生じてもおかしくはない状況なのだから！

絶対に探し出す――と、アラクセイトは心に決めていた。

そして、倒すのだ。そうしなければ、ソラミイノは取り戻せない。

銀色の、瘴気と月神気の混ざり合った炎――けれど制御されている以上、その糸の先に操り手がいるはずだった。

（絶対に見つけ出して、なにがなんでもミイノの居場所を白状させてやるんだから！）

そうは思うものの、実際のところはそれほど簡単ではなかった。

なにしろ、襲いかかってくる炎は、月神気と瘴気が完全に混ざった状態で、しかも火元と呼べるものがないのだ。先日の狼とは違い、実体というものがないから、斬りつけても効果がない。また、こちらが感査しようとしているのを見抜いてか、集中が高まりかけたころを見計らったように襲いかかってくる。

いくら守り石を持っていても、これでは消耗するばかりだ。

視界の隅で、ガネルオージェが奮戦しているのが見えた。先日とは違い、苦戦しているようではなかったが、それでも人間である以上、限界はくる。

もどかしく、歯がゆかった。なにかが、足りないのだ。この場で必要な、たったひとつの――なにか、が。

（ガネルオージェさんが戦ってるのに……ミイノが、きっと、待ってるのに……！）

なのに、自分に出来ることはなにもないというのか――!?

「そんなの……」

冗談じゃない――と言いかけた彼女の目に、銀色の輝きが飛びこんできたのはその瞬間のことだった。

銀の毛並みに砂金を散らしたような縞――その外見は犬か狼に近い。

瞳の色は綺麗な緑だ――ソラミイノと同じ、砂金水晶の双眸……。

「砂金ちゃんっっっ!?」

問う声に疑う響きが宿ったのは、体格とサイズが記憶にあるものと違いすぎるせいだった。

小犬ほどの大きさだったはずの『月犬』は、いまや巨大な狼ほどの体格を得ていた。そう……最初に出現し、アラクセイトとガネルオージェを襲ったあのときの姿のほうに、近い。

けれど、違う。違うことが、アラクセイトにはわかった。

（これは、砂金ちゃんだっっっ！）

瘴気がかけらも感じ取れない。

なにより、ソラミイノの気配が伝わってくる……そう、まるで分身でもあるかのように。いや、きっとそうなのだ。理屈もなにも必要とせず、すんなりと納得できてしまう自分がいる。

（砂金ちゃんが無事だってことは、ミイノも無事だってことだよね。うん、そうに決まってる……っていうか、そういうことにしちゃう！）

なによりの援軍だった。

しかもその援軍は、アラクセイトを困らせていた銀炎の抱える問題点まで、解消してくれたのだ。

砂金が銀炎に飛びこむ——と、ほとんど同時に炎を構成していた月神気と瘴気が分離したのだ。正確に言うなら、砂金は月神気を吸収することで、自らの力を増しながら、瘴気という格好の目印をアラクセイトに示してくれたのだ。

融合の解けた状態であれば、感査にさしたる苦労はなかった。

たどる糸——たどって、たどって……すぐに、見つけた。

「砂金ちゃんっっ！　ガネルオージェさんも伏せて……っっ！」

捕まえた力の緒——そこにアラクセイトは全身全霊をかけた攻撃を仕掛けた。

荷物の中から、金剛石製の鉈を取り出すなり、瘴気に投げこみ、それを媒介に火神イイター

ルの力を借りたのだ。
「きれいさっぱり、焼き尽くしちゃってください！」
紅蓮の炎が、瘴気の悉くを焼き尽くしたのは次の瞬間のことだった。
けれど、月光は、消えなかった。
月光に宿る神気は……消えなかったのだ。

「イダワントが消えたか……」
さして残念そうに聞こえない口調で少年がつぶやくのを、ソラミイノは、いまだ完全には衝撃から立ち直れない状況で耳にした。
目の前にいるのは、ワレンアイノではない。
その髪の色も瞳のそれも……雰囲気すら兄のものとは全然違う。
けれど、彼は同時にワレンアイノでもあるのだ——少なくとも、その肉体は。
だからこそ、なおさらに激しい違和感を覚えてしまう。
そんな彼女に、少年はうっすらと微笑み、こう告げた。

「ソーラ、きみの友達が、すぐに来るようだよ」
「その呼び方をしないで」
ぴしゃりと言い切ったその刹那、親友の声が耳に届いた。
「ミイノ！」
声のした方を振り返り、その紫紺の髪を目にしたとたん、なぜだかわからず、泣きだしたくなった。
（アーク……）
その傍らには、黒髪の青年がいた。
手には、青玉を嵌めこんだ、強い力を宿す剣が握られている。なにより、彼の放つ殺気が、彼の意志を物語っていた。
「あ……」
思わず、声を洩らしてしまう。
青年――ガネルオージェは間違いなく、目の前の少年を殺すつもりなのだ。それがわかる。
（でも……この肉体はワレン兄さまのものなのに……っっ！）
しかも彼はいまも生きているのだ！
しかし、そんな事情を知らないアラクセイトとガネルオージェは、さらに殺気を強めたので

ある。
「どうやらそいつが元凶らしいな」
より殺気を強めながらガネルオージェがつぶやいた瞬間、ソラミイノの背後で少年がくすりと笑った。
「残念だが、今日のところは退いたほうがよさそうだ……ソーラ」
だから、その呼び方はやめてちょうだい――と言いかける彼女を背後から抱きしめて、少年は笑いながら告げた。
「また、会いに来る……それまでに心を決めてくれていると嬉しいかな」
「誰がっ！」
叫んだ瞬間、背後の気配が薄くなった。
消えようとしている。
（逃がしたくない……けど……！）
ガネルオージェの放つ殺気が恐ろしかった。
「この……っ！」
殺気が、膨れ上がる！
「ガネルオージェさんっ！　炎で退路を断ちますからっ！」

親友の少女が、彼を援護すべく動こうとする！
反射的に、ソラミイノはそのとき叫んでいた。
「やめてっっ！　やめてちょうだいっっ！」
叫びながら、彼女は両手を広げ、叫んだ。
「ワレン兄さまを……殺さないで……！」
アラクセイトとガネルオージェの殺意がふっと薄れる。
まさにその瞬間を待っていたかのように、背後から、少年の気配が消えた。
涙が、溢れた。
「ごめんなさい……」
泣きながら、ソラミイノは何度も謝った。
「ごめんなさい……」
けれど、次こそは止めないと——約束することはできなくて、彼女はただ涙を流しつづけたのだ……。

エピローグ

死点の浄化において、最も目覚ましい働きを見せたのはソラミイノだった。

いや、アラクセイトやガネルオージェにできないことを彼女が一手に引き受けたというべきか……。

まず、彼女はアスカニーリの化身から委ねられた黄玉に、その空間を満たしている月神気を封じた。砂金という分身を得、さらにしばらくの間とはいえこの場に宿るそれに身を浸していた彼女は、月神気を扱う能力を身につけていたのだ。

さらに彼女は、封印石と化した黄玉を守るための結界を敷くにあたり、ほかのふたりを指導する知識を披露した。

封印石と連結させた五個の――ガネルオージェの――金剛石でもって五芒結界を張った上で、アラクセイトに火神の炎を召喚させたのだ。本来、燃えてしまうはずの金剛石だが、これは炎への方向づけを施すことで解決した。

アラクセイトの生み出した炎は、あくまで女神の化身から与えられた黄玉を通じて流れ出してくる、月神気のみを燃やし尽くすよう、条件づけたのだ。

「ええっと、つまり、ここに宿ってた月神気を焼き尽くすまで、この炎は消えないってわけなんだよね？　なんか、時間がかかりそう……もっと手早くちゃちゃっと浄化する方法ってないのかな？　その……封印の黄玉が、絶対奪われないっていう保証もないわけだし……」

それは無理ね、とソラミイノは答えた。

「瘴気ならともかく、ここに溢れていたのは正真正銘の神気だったんですもの。しかも、堕ちたとはいえ、神格では火神より上位に位置していた神の気配を、いくらアスカニーリ女神の助力を得たからと言って、そう簡単にどうにかできるわけがないでしょう？　それに、二度と誰もここには立ち入れないようになると思うわ。アークはそう、思わなかった？」

逆に問い返される格好になった少女は、かすかに目を瞠った後、小さくうなずいた。

「多分……そうなんじゃないかなとは、思ってた。あんまり当たって欲しくなかったんだけど……」

たったひとり、取り残された格好の青年が、ここで口をはさんでくる。

「どういうことだ？」

「わたしたちが出会ったあのアスカニーリさまは……っていうか、アスカニーリさまの分身だ

って仰った方は、恐らくはもう、人間の体を纏ってはいらっしゃらないんだと思います。だって、浄化のためにっていただいたこの石は……多分、子供石なんかじゃない、あの方が抱いて生まれてきた、聖石だと思うから……」

聖石と聖石の子供は、密接な絆を持つ。

半身と呼んでもいいほどだ。子供石ならともかく、ともに生まれた者が死去して後、残る聖石はないと言われる。そして、聖石を抱いて生まれてきた者が、自らの半身を他人に委ねるのは、死を覚悟したときか、あるいはそれ以上の決意と覚悟を固めたときに限られる。

だからこそ、神殿は修行中の子供たちや使徒たちの聖石を厳重に保管するのだ——貴重な存在である彼らが事故や自らの短慮で失われることのないように。

ごく一部の使徒を除き、自らの聖石を所持している者はいない。現に、アラクセイトもソラミイノも神殿に聖石を預けたままだった。

「それを手放したってことは……」

そう、とばかりにうなずいたのはソラミイノだった。

「聖石も一緒に生まれてきた人間も……どちらも存在してなきゃ、この結界は完成しない……だから、あなたたちの会ったアスカニーリさまが亡くなったとは思えない……けど、聖石にこまで異質な気配を宿して、無事でいられるひとがいられるとも思えない……」

殉じた——という言葉が一番相応しかっただろうか。
そしてすでに、それは彼らにとって、他人事ではなくなっていた。
三人の迷子が、放り出される格好になった。
「ミイノは、どうしたい？」
尋ねたのは紫紺の髪の少女だった。
真っ直ぐに、食い入るように見つめてくる視線を受けて、白金の髪の少女は本音以外……本当の望み以外を口に出すことができなくなった。
「わたしは……兄さまを、取り戻したい」
「じゃあ、そうしよう」
親友は、明るく笑ってそう答えた。
それがどれほど困難な道か、わからぬはずもないというのに。
けれど、その言葉と笑顔に励まされている自分を知っているから、ソラミイノはなにも言えなかった。

その日、世界の一部が衝撃に震えた。

預かっている聖石のなか、たった二粒を選び、複数の神の刻印が刻まれるという事態を、神殿が味わったからである。我知らぬまま、アラクセイトとソラミイノは使徒に選ばれたのだ。

あとがき

まず最初に――。

お気づきの方もいらっしゃるかとは思いますが、本書は予告されていた発売日に発売することができませんでした。偏に私の力不足が招いた事態で、この場を借りて、ぎりぎりまで尽力してくださった方々と、楽しみに待っていてくださった読者のみなさまにお詫びいたします。

さて、どういうことかと申しますと、以前使用していたワープロが壊れてしまったのがきっかけでした。

八年来の相棒であるハードディスク付きワープロが、作成文書（小説です）原稿用紙にして約七十枚ほどを、突然神隠しよろしくハードディスク内部から消し去ってくれたのが、今年始めのことでした。キーボード関連の理由で、相棒は以前にも何度か暴走を起こしたことがありましたが、今回の場合、明らかにそうではありませんでした。

さすがにこれ以上の使用続行は恐ろしく、新しい相棒を探そうとしたのですが、悲しいことに、後継機もすでに生産中止になっているということで、結局パソコンへの移動を決意したまではよかったのですが……ここで、また困った事態が持ち上がりました。

なにかと言いますと、私が長年相棒にしていたワープロのキーボードは、一般的と言われるJIS規格のものではなかったのです。おかげで一からローマ字入力を練習することになり、打ちこむのに時間がかかってしまいました。

いまではなんとか、指が大部分のキーの位置を覚えてくれたので、打ちこむのに不自由は覚えませんが、指は馬鹿……もとい、不器用なんだとしみじみ思いました。

さて、お詫びと事情説明という、あまり楽しくない話題から始まりましたあとがきですが、改めてご挨拶させていただきます。

続きを期待してくださっていた方には、大変なご迷惑をおかけしましたが……『聖石の使徒4　其は天秤をかざす者II』をお届けいたします。

ついに大ボス登場です。

でも、ラスボスかどうかはまだ謎（笑）。

二組の師匠コンビが目立ちすぎてくれたせいか、いまいち地味な主人公たちですが、これでようやく一人立ち……というか、自分たちの足で歩き始めました。

成長途上の未熟者たちではありますが、彼らの成長を見守ってやってください。

さて、新茶の季節です。

というところで、少々近況など。

最近目にするようになった『茶香炉』なるものを購入しました。
茶葉の香りを堪能する……はずなのですが、香炉に問題があるのか、葉に問題があるのか、それとも不精な性格が悪いのか、漂ってくる香りは『ほうじ茶』のそれだったりします。
繊細な手順を必要とする趣味には向いてないのかもしれません。
でも、香り自体は好きなので、いまもアロマポットで檜とユーカリの製油をたいてます。鼻炎気味な上に花粉症の身としては、ユーカリの製油は必需品です。檜は趣味です。昔から好きなんです。
ああ、しかし！
悔しい……というか、嘆かわしい。
ここ数カ月というもの、私は一本の映画も見てはいないんです。
せっかく『〇リー・ポッター』も『指輪物語』も映画化されたというのに！
まあ、『八〇ー……』は近日ＤＶＤが出るからそれを待つとして、『指輪……』はなんとか上映中に観に行きたいと思ってます。
プレステ2、買っといてよかったなー、とりあえず。
ああ、脈絡がない！
結びと行きます。

川野さま。

多大なご迷惑をおかけした上、今回の不祥事、いくらお詫びしても足りないとは思いますが今一度、お詫びさせていただきます。

そして。

本当にありがとうございました。

山本鳥尾さま。

組んで以来ずっと、ご迷惑をおかけしつづけ、申し訳ございません。

毎回、美麗なイラストを、楽しみにさせていただいております。

最後に、読んでくださる方々へ――。

お待たせして申し訳ありませんでした。

でもって、この話を少しでも好きになってもらえたら嬉しいです。

ずっと、書いていくことで、みなさんと関わりあいつづけていきたいです。

それでは――。

次は恐らく『聖石の使徒』か『破妖の剣』かのどちらかと思います。

平成十四年　某月某日

前田珠子

この作品のご感想をお寄せください。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101―8050 東京都千代田区一ツ橋2―5―10

集英社コバルト編集部　気付

前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、最近では実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅱ

COBALT-SERIES

2002年6月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　谷山尚義
発行所　株式会社 集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230) 6268 (編集)
電話　東京 (3230) 6393 (販売)
(3230) 6080 (制作)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2002　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN4-08-600102-0 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒

其は焔をまとう者

世界を守る「聖石の使徒」となるべく少女アークは神殿で修行をするが…。

聖石の使徒

其は力を放つ者

落ちこぼれのアーク。うちに眠っている絶大な力を制御できなくて…。

聖石の使徒

其は天秤をかざす者

親友ミイノと修行の旅をするアークが、神殿から受けた知らせは？



〈好評発売中〉 コバルト文庫

とびきり有能な人材、提供します。

イズァーカ商会へようこそ

前田珠子
イラスト／鈴木理華



イズァーカ商会はどんな厄介事も引き受ける、世界最大にして唯一の人材派遣会社。特殊護衛課のカリンたちのもとには今日も物騒な依頼が舞い込んできて!?トラブルコメディ！

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廈門 潤



漆黒の魔性
白焔の罠
柘榴の影
紫紺の糸（前編）（後編）
翡翠の夢1～5
女妖の街 破妖の剣 外伝①
ささやきの行方 破妖の剣 外伝②
忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③
時の螺旋 破妖の剣 外伝④
魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤
呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

コミック版 好評発売中

破妖刀・紅蓮姫を操る剣士ラスの
愛と闘い…大人気ファンタジー！

前田珠子/厦門 潤

破妖の剣

魔性降臨

白い焔に包まれて消えた街——その原因を探るラスと少年ザハトだったが!?



破妖の剣

紅の魔剣
碧の魔胎

最愛の使い手を失い暴走する紅蓮姫…。ラスと出逢う前の紅蓮姫の哀しい物語。



破妖の剣

深紫絃韻 1 2

魅縛師リーヴィの里帰りに同行したラスは、思いがけないピンチにおちいるが…!?

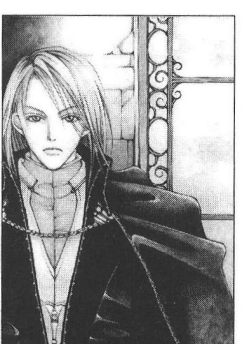


〈好評発売中〉 コバルト文庫

約束の庭でほほえむ、美しい妖魔。
華麗なる王国の幻想ファンタジー！

タラスタロスの庭

前田珠子
イラスト／木々



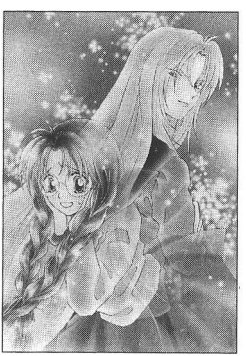
狂王カァスタイーンは残虐な殺戮の末、遂に広大な国タラスタロスを平定した。だがその裏には、選ばれし者にしか見えない、空中に浮遊する庭で会った妖魔との約束があった…。

〈好評発売中〉 コバルト文庫

新宿に吸血鬼出現？私が巫女体質？
ファンタジック学園コメディ！

女神さまのお気の向くまま1～3

前田珠子
イラスト／辻 よしみ



異界から侵入してくる怪物から「こちら側」の世界を守っているふたりの女神さま。そのひとり・嫦娥の依巫となってしまった高校生・桜子は超多忙、大迷惑な毎日を過ごしていて!?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

美しく切ない叙情ファンタジー

前田珠子

〈月下廃園〉シリーズ

イラスト／江ノ本瞳



月下廃園

月華の国の王子で、風の愛(めぐ)し児トゥミャーンは、王宮の庭園で出会った美しい人物が忘れられず…。

月下廃園2

ある想いから、自らを月華の王宮の庭園に呪縛しているセジュン。そんな彼を慕うトゥミャーンだが。

月下廃園3

トゥミャーンは光明神殿の使者として、セジュンが消えた月華に3年ぶりに戻ったが!?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

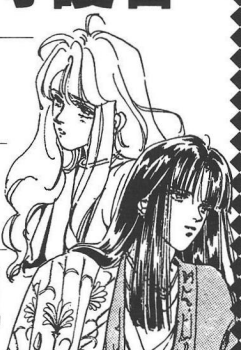
目覚めよ、永遠楽土を守る聖獣たち！

前田珠子 〈聖獣〉シリーズ

イラスト／おおや和美

まどろみの守護者
聖獣復活譚 前

銀の守り手
聖獣復活譚 後



目覚める日
聖獣覚醒秘譚　第一部

深き闇の檻
聖獣覚醒秘譚　第二部

昏き夜の果て(上)(中)
聖獣覚醒秘譚　第三部

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」（大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版（その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします）。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt（1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売）をごらんください。

9784086001021

ISBN4-08-600102-0

C0193 ¥438E

1920193004380

定価 本体438円十税



コバルト文庫